具志川市隅原遺跡発掘調査概報

高宮廣衛・比嘉春美・岸本義彦・宮城利旭
中村　愿・山田　正・吉本直子・上原　静

(一) はじめに

隅原遺跡はA～G地点を含む遺跡群の総称で、1971年9月、県教育庁文化課専門員の当真嗣一氏（当時前原高等学校教諭）によって発見された遺跡である。当真氏は同年、数回にわたって隅原地域の地表調査を行い、A・B・C・Dの4地点で多量の土器片や石器を表採された。またその頃、知名定順氏（当時本学経済学科4年次）がチャート製の石鏃1個をA地点で表採し、2年後の1973年には本学考古ゼミの諸君がたびたび同地を訪れ上記4地点の他にE～Gの3地点を確認した。

表採資料には前述の石鏃の他、浦添貝塚で初めて注意に上った貝殻の圧痕文を有する土器片、面縄東洞式、面縄前庭式等があり、また熱田原式、大山式、宇佐浜式等の破片も含まれ、良好な包含層に恵まれれば、それらの共伴関係がつかめるのではないかと考えられた。

ところで、隅原では終戦直後から数年にわたって大規模な採石工事が米軍によって行なわれ、景観は大きく変貌している。C・D両地点は特に保存状態が悪く、遺物包含層の一部が僅かに残存している状態で、E・Gの両地点は採土および採石工事によって遺物包含層が大きく削り取られ、F地点は米軍の基地建設に伴う工事によって攪乱を受け、後述のように未攪乱層は認められなかった。A地点は発見当時最も損壊の少ない箇所であったが、その後、採土が行われ、遺跡の北西部は大きく凹んでいた。

今回はA・D・Fの3地点で試掘調査を行ったが、発堀にかかる資料は少く、そのため本文記載の遺物は表採品が主体を占めることになった。

起稿にあたり、石質を鑑定して下さった琉球大学の木崎甲子郎教授、貴重な資料の発表を快諾された当真嗣一氏ならびに本学考古学研究会、調査に際しいろいろ便宜を与えられた具志川市教育委員会、区長の名嘉真治夫、県議会議員の中山兼順、地主の中山兼明、福原兼宝、安里安喜、糸満盛善の各氏、学生の指導にあたられた教育庁文化課の知念勇氏に感謝申し上げたい。

なお、資料の整理および報告書の作成にあたっては下記の通り分担した。

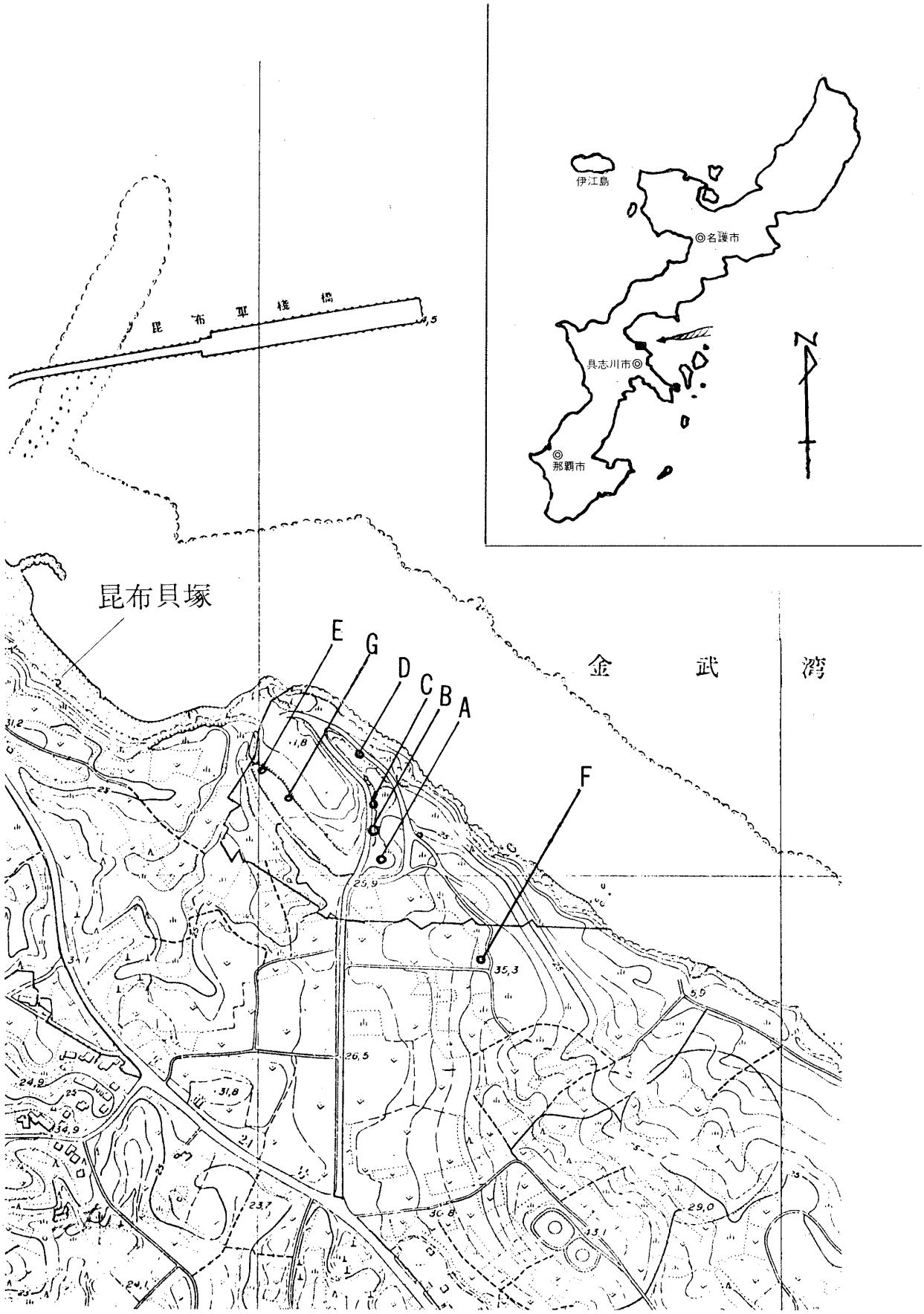
A地点　中村　愿・比嘉春美
C地点　宮城利旭
D地点　宮城利旭
E地点　岸本義彦・上原　静
F地点　山田　正・吉本直子
G地点　上原　静・岸本義彦

(二) 自然環境

隅原遺跡は具志川市字昆布隅原に所在する。

具志川市は太平洋に突き出た勝連半島の基部に位置し、那覇から約29km.，北は金武湾、南は中城湾に面する広大な面積を有し、先史遺跡も多い。現在のところ、旧石器時代の遺跡は知られていないが、新石器時代の遺跡としては、前期の天願、太田、地荒原の諸貝塚、後期の昆布、宇堅、アカジャンガー貝塚等が知られ、最近では中期の時期を含む隅原遺跡が発見されるなど、調査が進めば遺跡の数も増加するものと思われる。

遺跡の所在する字昆布は具志川市の西北端部に位置し、北は金武湾に面し、西は石川市の東恩納に接している。一帯は琉球石灰岩を基盤とした、標高20～50m.の小丘の起伏する、いわゆる島尻マ



第１図　沖縄全島図及び隅原遺跡附近見取図

ーヂ地帯で、大部分は開墾され畑地となっているが、耕作不能の石灰岩地帯や丘の急斜面にはまだ松林が残っている。原野にみられる一般的な植物は、他の地域と同じくカヤ、ススキ、ソテツ、アダン、ニガナ、ヨモギ、野イチゴ等である。

隅原遺跡は現在の集落から約500m.東方の、海岸沿いの標高20～40m.の丘陵頂部に立地し、そこからは西に石川市、北に金武村を望むことができまた、目を東方に転ずれば平安座、宮城、伊計の各小島が指呼の間に見える。遺跡の近くには、1971年の毒ガス移送の際問題となった米軍の天願桟橋があり、それにつらなる砂丘には前記の昆布貝塚がある。

遺跡北東部に広がる海岸は珊瑚礁の浅瀬と砂浜からなる。砂浜は戦後の開発によって一部を残して壊滅してしまったが、先述の状況からすると珊瑚礁に生息する貝が多かったとみられる。しかし、今回調査した前記7地点の遺跡には貝殻の埋存がみられず、どの程度海産の貝に依存したかは不明である。また、発掘を実施した範囲でいうなら、獣魚骨等も皆無の状態であった。

採石場の中央には泉があり、遺跡は現在この泉を囲むように分布しているが、採石前においては海岸よりの北側の低地で湧出していたようである。先史人達の唯一の水源であったとみられる。

㈢ 調 査 経 過

調査は1973年7月12日から26日にかけての15日間実施する予定で着手したが、途中台風21号の通過によって、19日以降の調査は不能となった。この期間にF地点の予定の4ピットを完了したが、前述のように最下部まで攪乱を受けていた。

F地点は台地平坦部の遺跡で、規模も5m.四方と小さく、立地上の類似から読谷村赤犬子(註1)で推定されたような、小規模（例えば家族単位）の遺跡群を構成する例かと考えたが、附近に類似の遺物包含層は見られなかった。

第2次調査は同年11月23日から同月26日までの4日間、AおよびD地点において行った。

A地点は前述のように発見後、北西部の大部分が採土によって削り取られ、この部分では30～40cm.の暗褐色土層が残っていたが、今回は遺物保存と住居趾の有無を確かめるため、この凹地の箇所で試掘を行った。この凹地の東部および南部には未攪乱層が残っているが、遺物の埋蔵量は少いようである。この暗褐色土層については古川博恭氏による地質学的所見があり、これについては後項「A地点」に記した。

D地点も諸種工事による被害が著しく、暗褐色土層が僅かに基盤の石灰岩に付着するような形で残っていた。1m.四方の小規模の試掘を行ったが、土器片が2個出土しただけであった。

上記各試掘地点の地籍および所有者は下記のとおりである。

A地点	字昆布隅原1519	中山兼明
D地点	字昆布隅原1502	福原兼宝
F地点	字昆布隅原1532	安里安喜

㈣ 各地点の遺物

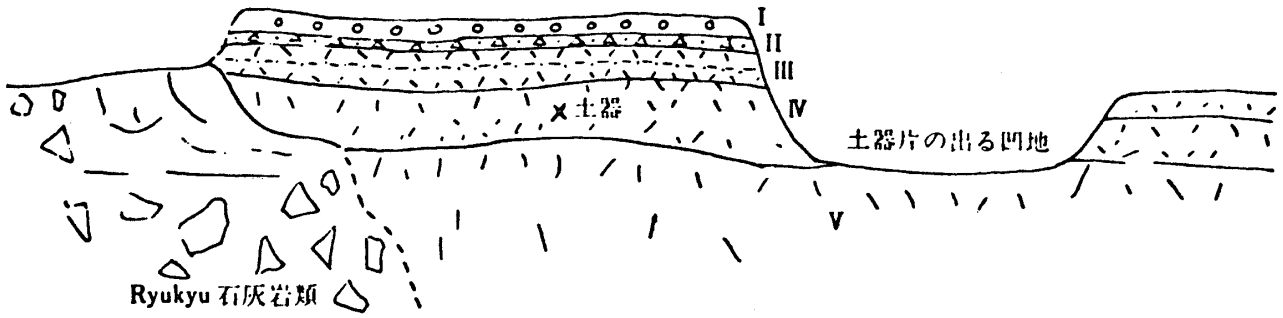
Ⅰ）A地点

（A）調査経過

A地点は採石場の入口より海岸に下る道を50m.ほど入った右手の凹地にある。発見当時、前記7地点のうちで損壊の最も少ない箇所であったが、ブルによる採土が行なわれたため黒土層の大部分が除去されてしまった。採土量はB地点に接する部分と道路側の部分で最も多く、採土後の地表面は全体的に北西方向に傾斜し、その部分では地山が露出していた。A地点の包含層はB地点へ続くと思われるが、採土前の状況が不明であり、とりあえず、B地点をA地点より区別した。（第1図、PL.1の写真1）

A・B両地点に見られる黒褐色土層については古川博恭氏(註2)による次頁(第2図)の観察がある。

A地点では遺物の散布状況および黒土層の状況から北西方向にHトレンチを設定した（PL.1の



I 層　75YR5/6（brown）礫まじり砂壌土。塊状構造をもち、一部は板状になり、層理を示すことあり。赤褐色土の小塊を混在。層高30cm。

II 層　75YR6/6 砂礫層。海浜砂（wellsorting）を基質とし、二枚貝・巻貝・サンゴを含む。海成層？層高30～50cm。

III 層　75YR4/4 上部20cm腐植をやや含む、炭質物あり、魂状構造、砂壌土～壌土。下部に古生層細円礫を含み、層状構造を示す。層高70cm。

IV 層　75YR3/3（黒褐色）埋没腐植土、弱角塊状～粒状構造やや polus, 壌土～植壌土、下部に古成層細 礫散点。層高50cm。土器片散点。

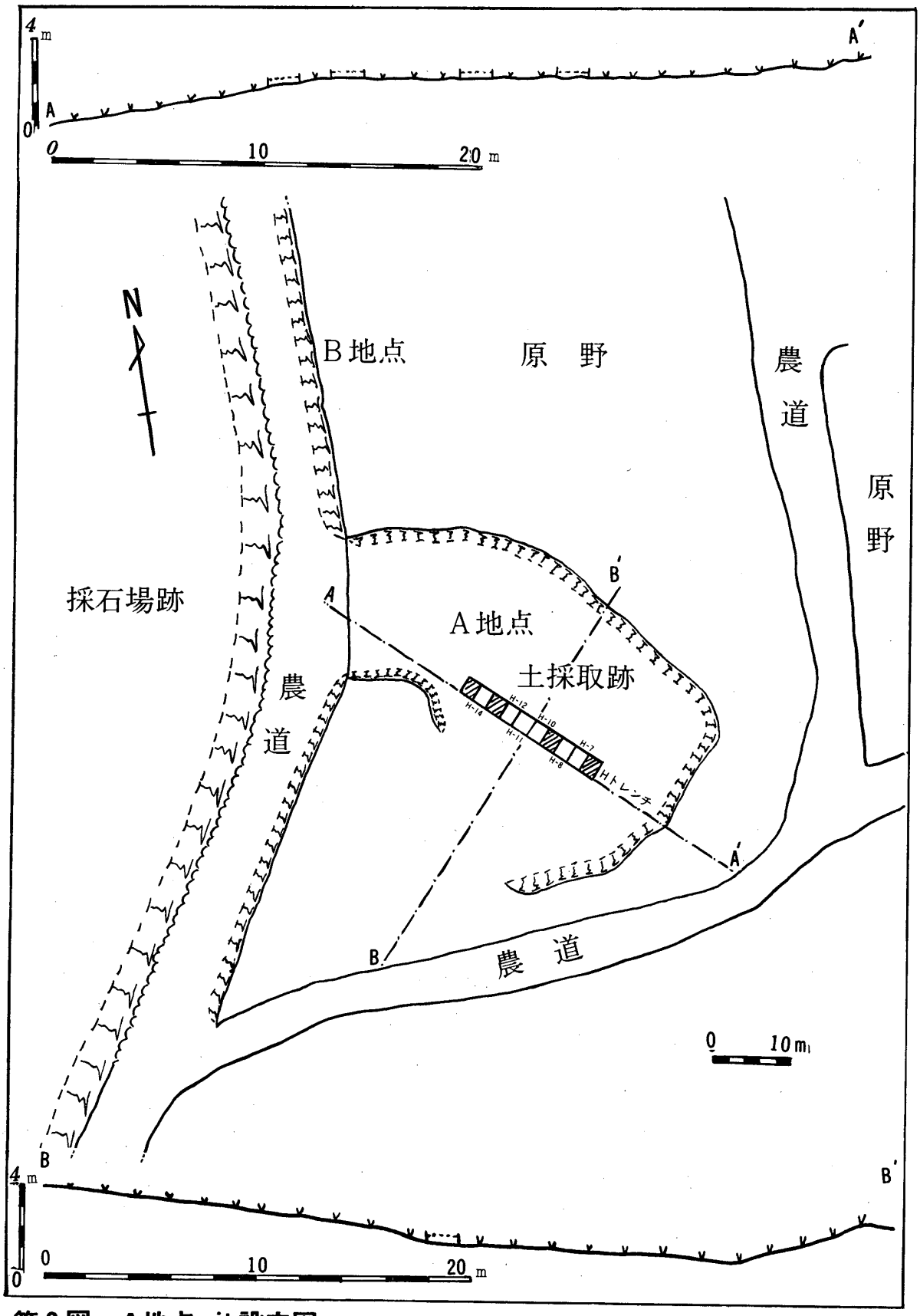
V 層　上部10YR5/6 下部75YR5/8 最上部は有機質を含む。壌土～植壌土、塊壌構造、下部に亜円礫の細一小礫が層状に分布（水成？）。層高100m±。

基盤　上の露頭は琉球石灰岩層。国道沿い（米軍基地横）の露頭は島尻層群（第三紀層）。

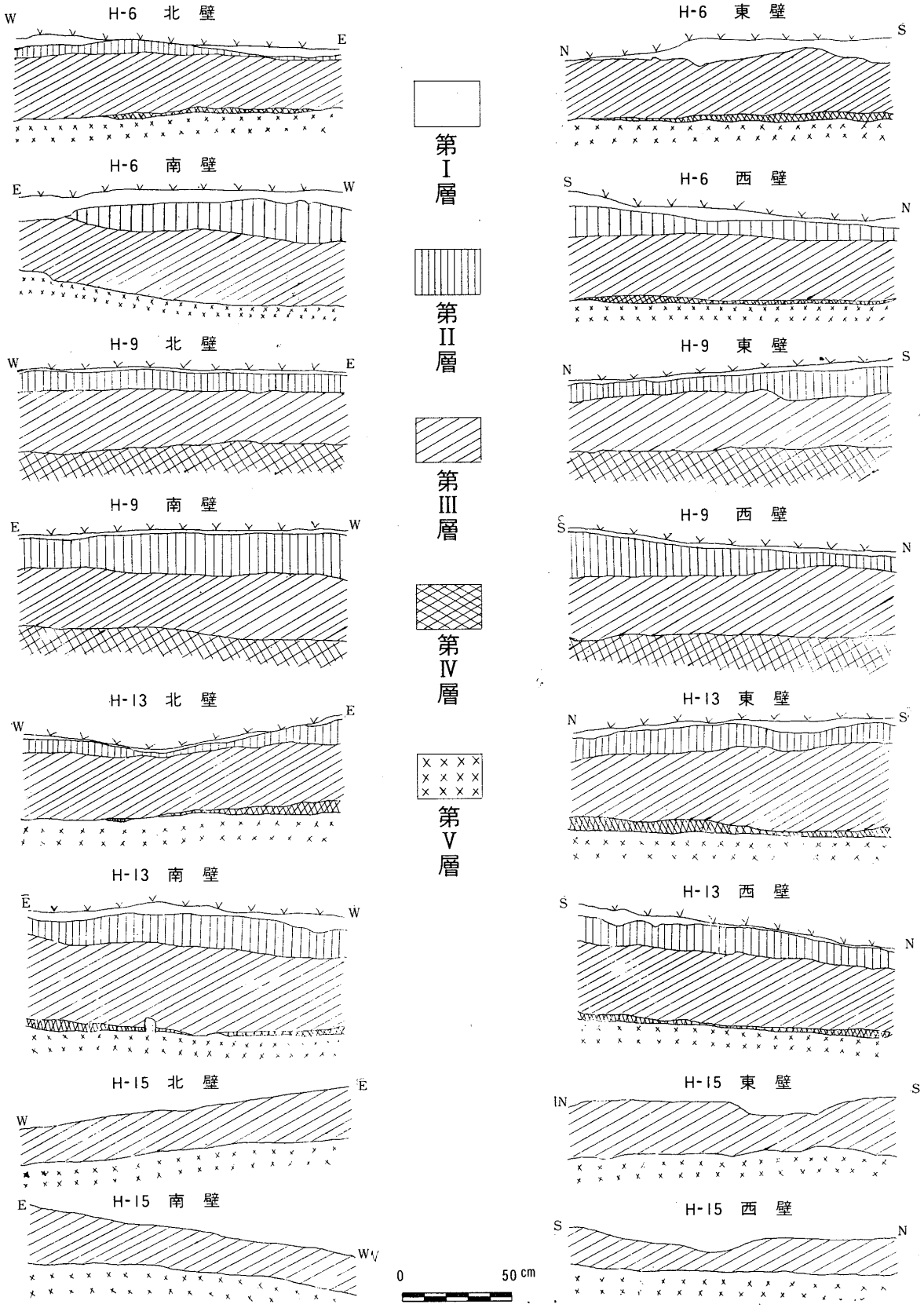
第2図　具志川市昆布シミバル露頭（古川博恭氏による）

第1表　隅原土器の一般的特徴

第土 I 類器	沖縄諸島の前期を代表する土器で、焼成は悪く脆弱であるが、器面調整は良く、擦痕を施すものが多い。石英を多量混入し、まれに長石を含むのもある。器色は茶褐色が普通で、赤褐色や暗褐色を呈するのもである。器厚は7mm.前後のものが多い。
第土 II 類器	奄美諸島のいわゆる宇宿下層式の文様を有する土器にみられ、胎土の粒子が細かいものとやや荒いものがあり、普通、石英を混入するが、雲母を少量含むのもある。焼成は一般に悪く、器面は磨耗しているものが多い。器厚は5mm.前後の薄手で、器色は茶褐色や黄褐色が普通で、赤褐色を帯びたのもある。
第土 III 類器	中期にみられる砂質土器のタイプで、石英を多量混入し、雲母を含むものもある。器面はやや荒く、手触りはザラザラしている。焼成は良いのと悪いのがあり、器色は茶褐色や黄褐色が一般的だが、暗褐色を呈するのもある。器厚は5mm.前後で比較的薄い。
第土 IV 類器	中期にみられる泥質の土器で、吸水性が強く触ると粉末がつき、焼成は極めて悪く脆弱である。石英を少量含み、器面のポーラスなものが多い。器色は黄褐色のものが多く、茶褐色や暗褐色を呈するのもある。器厚は10mm.前後の厚手のものが多い。
第土 V 類器	後期土器の一種で、泥質だが胎土はやや荒く、焼成、器面調整ともに第IV類より良く、まれに石英を含むが、皆無に等しい。器色は黄褐色からやや赤味がかかった黄褐色が一般的で、茶褐色のものを含む。器厚は5mm.前後の薄手のものが多い。



第3図　A地点 pit 設定図



第4図　A地点pit 断面図〔ピットH-9は第Ⅳ層の0～10cm.レベルで発掘を中止した〕

3)。第1次調査ではピットのH—10より発掘を始めたが、前述のように台風接近のため、地表下10cm.の調査を終えることができなかった。第2次調査では、H—6・9・13・15の4ピットで発掘を行い、10cm.ごとに掘り下げた。

層序はH—6・9・13の3ピットでは4層認められたが、ピットH—15は第I層と第II層が採土によって削られ第III層から始まる。第I層は厚さ5cm.前後の採土後に堆積した赤褐色土層で、無遺物層である。第II層は厚さ12cm.前後の茶褐色土層で、遺物がわずかに含まれていた。第III層は厚さ35cm.前後の黒褐色土層で、遺物はどの層よりも多く全体の80%出土した。第IV層は第II層と同じく厚さ10cm.前後の黒褐色土層で、遺物は少なかった。上記のII層～IV層は古川博恭氏の第IV層(第2図)にあたる。なお、第III層採集のチャーコールを古川博恭氏の御好意で学習院大学で測定してもらった結果、1640±250 B.P.(GAK-5125)(註3)という数値を得た。

(B) 出土遺物

本地点の出土遺物(第2表)は表採資料173個、発掘資料 253個の計 426個で、そのうち人工遺物は 237個で土器や石鏃(1個)が得られたが、自然遺物の 190個は自然礫と焼土のみで貝殻や獣魚骨は全く見当らなかった。

a)土器

本地点の土器を説明する前に、隅原の土器について通観しておきたい。本遺跡の以下に述べる7地点の土器は、胎土、焼成、色調、混入物、器面調整、その他の特徴から5類に大別できる。第1表にそれらの特徴を示したが、第I類、第II類は前期、第III類の砂質土器及び第IV類の泥質土器は中期、第V類は後期の土器で、この分類は特に無文の胴部破片を見る際の基準とした。

本地点の土器は表採資料 163点、発掘資料73点の計 236点で、埋蔵量は非常に少なく、しかも、発掘資料は2cm.前後の小破片ばかりで、復元可能な土器は含まれていない。

遺物 / 層序	土器			焼土	自然礫	その他		合計
	口縁	胴部	底部			チャート	水晶	
I 層	0	1	0	0	1	0	0	2
II 層	0	9	0	55	2	0	1	67
III 層	0	58	2	58	53	1	0	172
IV 層	0	3	0	5	4	0	0	12
小計	0	71	2	118	60	1	1	253
表面採集	1	157	5	0	10	0	0	173
合計	1	228	7	118	70	1	1	426

第2表　A地点出土遺物集計表

第5図1(PL.3の1)は凸帯を付して口縁を肥厚させたもので、口唇部に1列、肥厚部に2列の左から右へ横捺文を施す灰褐色の土器で、器面はかなり磨滅しているが、焼成は良好である。胎土に石英を多量混入する。口縁部が肥厚し、肥厚部に施文する手法は沖縄の前期後半の土器に見られるが、胎土や焼成及び施文手法はより奄美的で奄美の編年では宇宿下層式(註4)の範疇に属するかと思われる。表採品である。

胴部はすべて無文で、表採資料 157個、発掘資料71個である。器壁は5～6mm.のものが最も多く、

色調は主に茶褐色を呈する。これらを第1表によって分類すると表採資料は第Ⅰ類（41個）、第Ⅱ類（44個）、第Ⅲ類（1個）、第Ⅴ類（71個）で、第Ⅴ類土器は全体の44%を占め、次に第Ⅰ類25.9%、第Ⅱ類29%という比率であるのに対し、発掘資料では、第Ⅱ類が2個（3%）、第Ⅴ類が69個（97%）と第Ⅴ類が圧倒的に多く、A地点の遺物包含層を第Ⅴ類の時期に比定することが可能である。したがって、表採資料の第Ⅰ類、第Ⅱ類の土器はA地点のものではなく、近隣の遺跡からもちこまれたものであろう。

底部は表採資料5個、第Ⅲ層で2個の計7個得られ、尖底、平底、くびれ平底に分類できる。

第5図3は厚さ1.3cm.のやや丸味をおびた尖底で砂粒を多量に混入し、外面暗褐色、内面赤褐色の脆弱な土器で第Ⅲ類に属し、沖縄の中期前半の特徴を有するが、奄美では面縄前庭式(註5)か宇宿上層の時期のものであろう。表採品である。

第5図5はピットH—15第Ⅲ層10～20cmレベルの出土である。底径推算5.2cm.厚さは底部中央部で約0.5cmの薄手の平底破片である。胎土に石英や赤褐色の物質（粘土の粒？）を少量含む黄褐色の土器で、底部から胴部への移行部は一種のコンケィヴ状の立ち上りをみせ、また、底部外面の中央部は若干凹んでいる。

第5図6は表採品で、小破片のため底径は不明である。厚さ約0.9cm. 焼成は良く、砂粒を少量含む。器色は黄褐色で器面は磨滅している。

第5図2（PL.2の1）はピットH—6第Ⅲ層10～20cm.レベルの出土で、底径4.6cm.厚さ約1.4cm.のくびれ平底である。胎土は非常に細かく、泥質で色調は内外面とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。底は若干丸味をおびている。

第5図4は表採品で、底径約4.5cm.厚さ約1.4cmのくびれ平底である。胎土に石英、雲母を少量含む赤褐色の土器で、焼成は良好である。

第5図7・8は表採品で、小破片のため両者とも底径は不明である。器壁の厚さは同図7が約0.4cm.と非常に薄く、同図8は厚さ約1.1cm.である。

以上に述べた底部は第5図3を除き、黄褐色ないし赤褐色の器色を有し、砂粒を少量混入する、吸水性の高い土器で、第Ⅴ類土器に属する。焼成、胎土、色調、底部の形状からみて後期の土器に属する。

b）その他の遺物

前述のように、貝殻や獣魚骨などの自然遺物の出土はなかったが、砂岩22個、輝緑岩3個、千枚岩5個、石英25個、褐鉄鉱1個、泥岩1個、チャート1個、水晶1個が層中より検出されている。これまで水晶が遺跡で発見されたことはなく、本遺跡ではピットH—13第Ⅱ層0～10cm.レベルで検出されたことから後世の混入も考えられる。本品は高さ1.5cm.幅3mm.の六角柱状の小破片である。

第5図9のチャート製の石鏃は知名定順氏が数年前、本地点で表採したもので、長さ2.5cm.最大幅1.5cm.の打製である。石鏃の出土はこれまで、城嶽貝塚(註6)やシヌグ堂貝塚(註7)等の前期後半～中期初頭に属する貝塚で出土していることからみると本地点においては第5図1の土器に伴う遺物かと推察される。

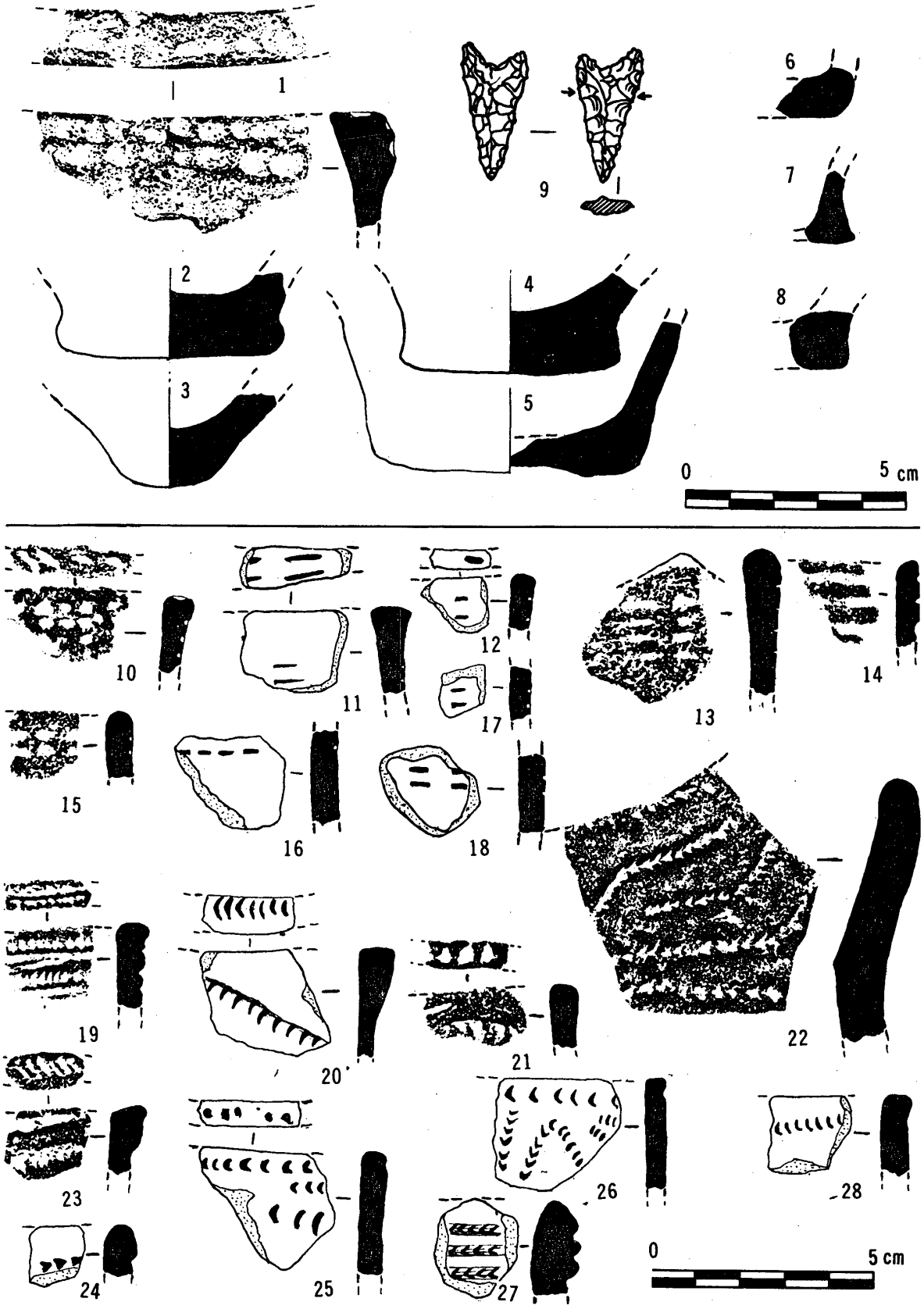
（C）遺　構

ここに遺構としたものは、遺構らしきものという程度で、はっきりしたものではない。H—6・13の両ピットの茶褐色土層において黒褐色土の埋ったホールが数ヵ所確認された。

ピットH—6の第Ⅳ層10cm.レベル(PL.2の2)で4つの穴が発見され、北西方向に集中している。同層の上面は南西壁の方に傾斜（約4度）している。それらの穴では周囲よりチャーコールが少し多いように見受けられた。

穴は北より、1号穴、2号穴、3号穴、4号穴とし、1号穴は直径12.5cm. 深さ4cm.，2号穴は直径16.5cm.，深さ8cm. 3号穴は直径12cm.，深さ25cm.，4号穴は直径20cm.，深さ11cm.，である。ピットH-13でも直径14cm.，深さ4cm.の穴が1つ発見された。

上記の穴は一般的に浅く、今回の調査でそれらの性格はつかめなかったが、次回はさらに調査範囲を広げ確かめたいと思う。



第5図　A・C地点の出土遺物
〔1～9＝A地点、10～28＝C地点〕

（D）考　　察

以上、本地点採集の遺物について簡単に記述した。土器についてみると、表採品には第Ⅰ類が多く、発掘資料では第Ⅴ類が圧倒的に多かった。したがって表採資料の大部分は本地点の土器というより、近隣の地点からの流入かと考えられ、本地点の時期は第Ⅴ類土器の時代に比定できるかと思う。

第Ⅴ類土器には口縁部の破片がなく、器形の復元は不可能だが、底部の形状からすると平底の甕形土器かとみられ、無文化の進んだ段階の土器かと考えられる。このことからすると後期でも新しい時期かと考えられ、前述のカーボン年代は参考になるが、立地が後期の貝塚と異なり、丘陵頂部にあり、また、貝類等の自然遺物を含まないことから中期に近い時期の遺跡かとも考えられる。現在、類例遺跡が知られてなく、編年上の位置づけは当分保留しておきたい。

II）C地点

（A）遺跡の概況

B地点に北接する原野に所在し、採石場に通じる道路の開削および採石工事等によって地形は大きく変貌している。本地点の標高は約23m．この丘陵は北西側にゆるやかな傾斜を示し、東北側では比較的急傾斜で海岸にせまり、そこでは約6m.の断崖を形成している。A・B両地点に見られる厚さ50cm.前後の暗褐色土層（前記古川氏の第Ⅳ層、PP.4）はC地点まで延びておらず、本地点の南側約5m.のところで切れている。したがって、ここでは暗褐色土層は認められず、地山の赤土の斜面に周囲の赤土よりわずかに黒味を帯びた極めて薄い土層がおおよそ2m.四方の範囲で見られ、そこから土器・石器などが採集できる。貝類は含まれてないようである。本地点の土器には沖縄諸島の前期的特徴を有する土器片も含まれ、そのことから果して現地点が本来の包含地なのか疑問が残るが、周囲が大きく変貌しているため、それを確かめることはできなかった（第1図およびPL.1の1）。

（B）出土遺物

ここに紹介する本地点の遺物はすべて表採品（土器片115個・石器17個）で、当真嗣一氏提供のものと、我々が1973年以降採集したものである。

a）土　器

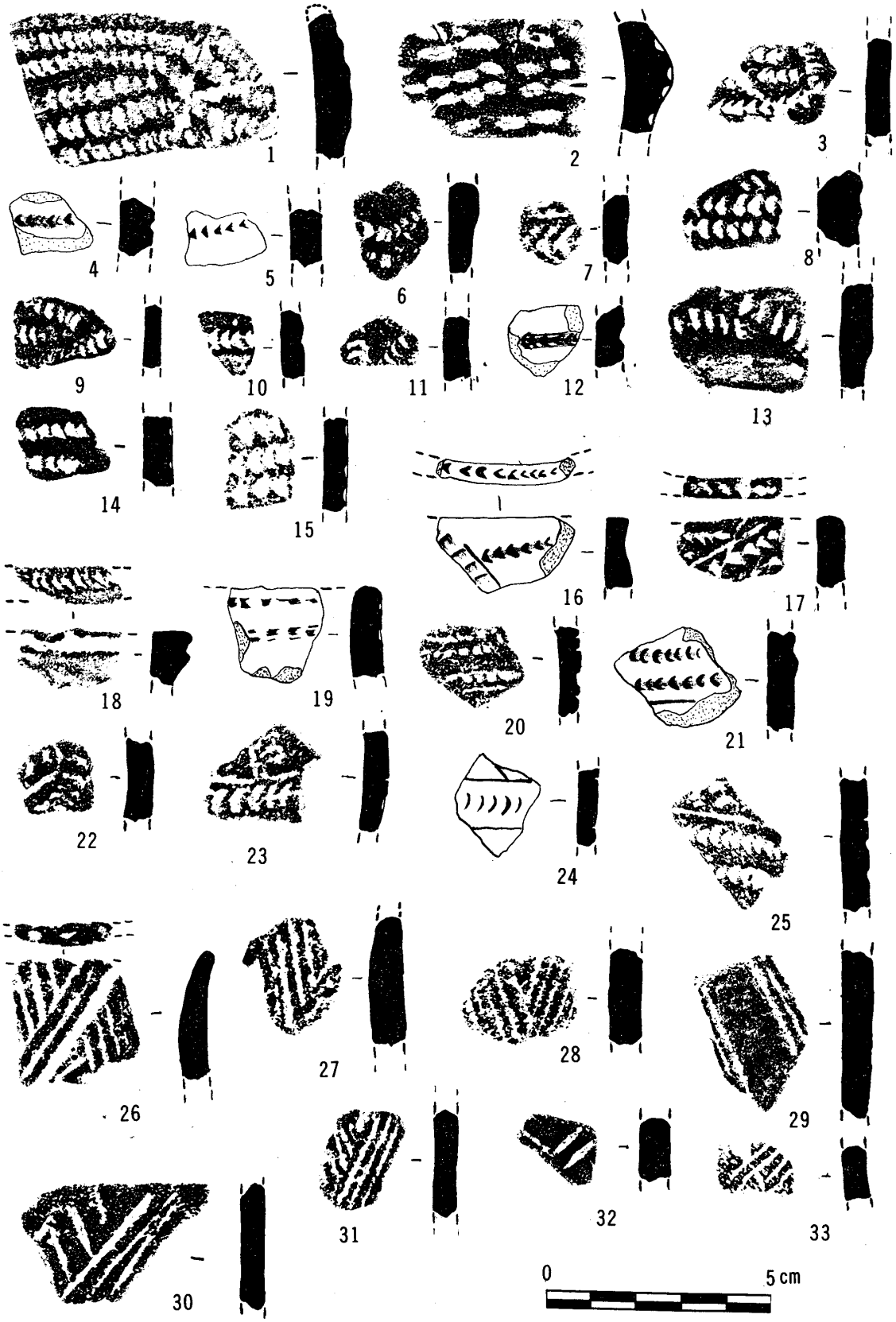
土器は口縁部21（有文20）、胴部88（有文45）底部6の計115個であるが、破片が小さく全形を復元しうるような資料はない。器形は口縁部の形状からすると甕形もしくは深鉢形かと思われる。文様は沖縄的なものと奄美的なものに大別されるが、量的には後者が多く、沖縄諸島についていえば浦添貝塚（註8）に類似する遺跡である。以上の土器は型式不明のものを除くと大体下記の7種に分類されるが、奄美的特徴を有する土器については河口氏（註5）の分類に従った。本地点の土器は一般に磨耗が著しく、拓影のとれないものは図で示した。

1．熱田原式土器

先端が叉状になった工具を用いて点刻を施すもので、2点が1組となり、点は弧立的に施される。熱田原貝塚（註9）に多量出土をみた土器である。

第5図10～18（PL．3の2～6・8～11）に示したもので、口縁部および胴部の破片である。同図10～12は口縁部に点刻・短沈線を施文する。13は山形突起口縁であるが、突起部の断面は扁平に近く熱田原的特徴を有する。16は水平方向に1列だけ点刻が見られるが、上部の破損部にはそれらとペアーをなす点刻文が施されていたものと思われる。口縁は直口状のものが多く、石英類を多量に含む脆弱の土器で、色調は暗褐色のものが多く、赤褐色のものも少量ある。磨耗が著しく擦痕の有無は不明である。

第6図2（PL.3の21）は胴部の破片で凸帯を横位に貼付し、凸帯上およびその上下に点刻文を施文する。表面は黄褐色、裏面は暗褐色で器面はかなり磨耗し、文様は消えかかっている。類例は熱田原貝塚（註9）で報告されている。



第６図　C地点採集の遺物

熱田原では点刻文と他の文様要素との組合わせが豊富に見られたが、本地点の土器は破片が小さく、上記の点刻文にどのような文様要素が組み合わされたか不明である。

2．凸帯を有する土器

第7図14（PL.4の29）は口縁破片で、口唇部を欠損するが横位に2条、縦位に1条の凸帯が見られる。凸帯はまず横位より始め、次に縦のものを貼り付けている。荻堂(註10)に出土例があり、広義の荻堂式に含めてよい土器かと思う。荻堂例からすると縦位の凸帯は山形突起口縁の直下にくるものと思われる。赤褐色の脆弱な土器である。

3．面縄東洞式土器

爪形文や先の尖った箆を連続して刺突する文様をここにまとめたが、厳密な意味での東洞式は少なく、大部分は東洞式を構成する諸要素のうち若干を欠いている。したがって後者は東洞式というより東洞式くずれといった方がよいと思われるが、後者については更に資料を得た上で検討したいと考えている。

面縄東洞式と認めてよいものは第5図22（PL.3の18）、第6図1・3・6・8・9・11・13～15の10個で、第5図22の口縁は波状を呈し、器壁は厚く、他の土器より口縁の外反は強い。口縁部下端欠損のため、口縁部の肥厚については確かめ得ないが、文様構成からすると面縄東洞式に含めてよいと思われる。施文は浅いから時代の下るものであろう。他の9個は文様構成や口縁部肥厚等の特徴が面縄東洞式に一致する。

第5図24・26・28および第6図4・5・7・10・12の8個は口縁部の肥厚しないものや連続刺突文の施された胴部破片で、前者の中にはウタハ式(註11)に含めた方がよいと考えられるものもある。後者は胴部の小破片で、文様の全景や器形との関係も不明で、中には沈線の部が欠落した嘉徳Ⅰ式の破片が含まれている可能性もあるが、とりあえず面縄東洞式に含めることにした。

第5図20・23・25および第6図18の4点は口唇部に施文する例で、第5図20・23と第6図18の3個は口縁がわずかに肥厚している。口唇部に施文することから嘉徳Ⅰ式に含めるべきかと考えたが、沈線がみられないので、仮りに面縄東洞式に含めておく。

以上の文様についてみると、凹線の深いものは第5図27の1例だけで、他は浅い。また、文様を密に施す例も少い。第5図22の1例を除いて、一般的に器壁は薄く（4～6㎜.）、色調は赤褐色を帯びたものが多く、暗褐色のものは少い。胎土は粒子が細かで、焼成は悪く、砂粒や石英類を含むが混入量は少い。器面調整に刷毛目や貝殻を使用したものはみられない。

4．嘉徳Ⅰ式A

爪形沈線文土器をここにまとめたが、嘉徳Ⅰ式Bに相当するものは発見されていない。

第5図19（PL.3の12）は口縁部に2条、口唇部に1条の爪形文が見られる。口縁部の文様についてみると横位の沈線は押し引きによる一種の凹線で、一部には上部の爪形文とペアーをなす部分も見られ、幅や形の異る叉状工具を用いたものかと考えられるが、器面がかなり磨耗していて両者のはっきりした関係はつかめない。同図21（PL.3の14）は口縁上方に1条の斜沈線が認められ、口唇部には比較的深い刻文が施されている。

第6図では16・17・20～25（PL.3の40・41およびPL.4の2～7）の8個に沈線が見られる。爪形文も沈線も、ともに浅く、押し引きによる凹線も浅い。16と17は口縁破片で口唇部にも文様を施している。

以上の土器は器壁が薄く、赤褐色と暗褐色のものが半々含まれ、胎土は粒子が細かで、石英や砂粒を含むが、混入量は少い。器面に刷毛目を有するものは見られない。焼成は比較的良好である。

5．沈線文土器

第6図26～33（PL.4の8～15）と第7図1～4（PL.4の16～19）および第7図8（PL.4の24）の13個で、施文具には単箆を用いたものと叉状工具を使用したものがある。

同図26は口縁破片で口唇部に刺突文を有し、この破片と27・28・30・31の5個には数本の方向の異る斜沈線が施され、29・33には叉状工具を用

いた沈線が施されている。33を除き沈線は一般的に細く、施文も浅い。

第7図1・2の文様は前記の文様と一致する。3は斜沈線が1本認められるだけで、4は籠目の構成をとる。同図8は横捺刻文と斜沈線の組合わされた例である。

以上の土器は焼成・厚さ・胎土の粒子・混入物等、前項の土器と同じで、器色は赤褐色のものが多く、暗褐色のものは少い。沈線文の構成をみると、浦添貝塚の沈線文には類例が多いが、嘉徳II式には少いようである。

6．宇佐浜式土器

第7図5（PL.4の20）は宇佐浜式口縁の破片で前述の土器に比べると石英を多量混入し、焼成は悪く、脆弱である。

7．類市来式土器

第7図6は口縁の肥厚部に貝殻文を施文する類市来式土器の破片であるが、器面がかなり磨耗していて、文様はG地点のものほどはっきりしない。

8．その他

第7図9（PL.4の25）は口唇部に点刻文を有する口縁破片である。同図10（PL.4の26）は斜行の点刻文、11（PL.4の22）には縦位の刻文、12（PL.4の27）は横位の刻文、13（PL.4の28）は箆を押し引きした凹線であるが線は浅い。

以上の土器は第7図5の宇佐浜式と第7図21を除くと時代的には前期の範囲におさまる土器と見られる。

第7図21の無文胴部破片は焼成のいい黄褐色の土器で、器壁が極めて厚く、その点で前述の諸型式の土器とは異っている。おそらく、前述の土器の系列から外れるもので、後期のある時期に属する土器とみられる。

9．底　部

底部は6個の発見があった。第7図15～20に示したもので、20は底径の推定できるもので約6㎝.である。この底部は前期の典型的な平底で、胎土の粒子は荒く、脆弱で、石英や砂粒を混入する。外面は暗褐色、内面は赤褐色で底部から胴部への移行部はコンベックス状のカーブを形成するのが特徴である。

他の5片は、胎土・焼成・色調・混入物等、前述の奄美的文様土器と一致するもので、底部から胴部への移行部はコンケイヴ状のカーブを示す。同図19の底径は約6㎝.である。

b）石　器

第8図1（PL.7の4）は砂岩製の磨製両刃石斧で、頭部と刃部に敲打痕が見られ、刃はつぶれている。石斧を他の用途に転用したものであろう。

同図2（PL.7の7）は砂岩製の凹石で、著しく破損しているが、扁平の面に凹みが見られる。

その他の石器

研磨痕を有する破片が14個ある。中には磨り石の破片かと考えられるのも若干あるが、大部分は小破片のため器種は不明である。

（C）結　び

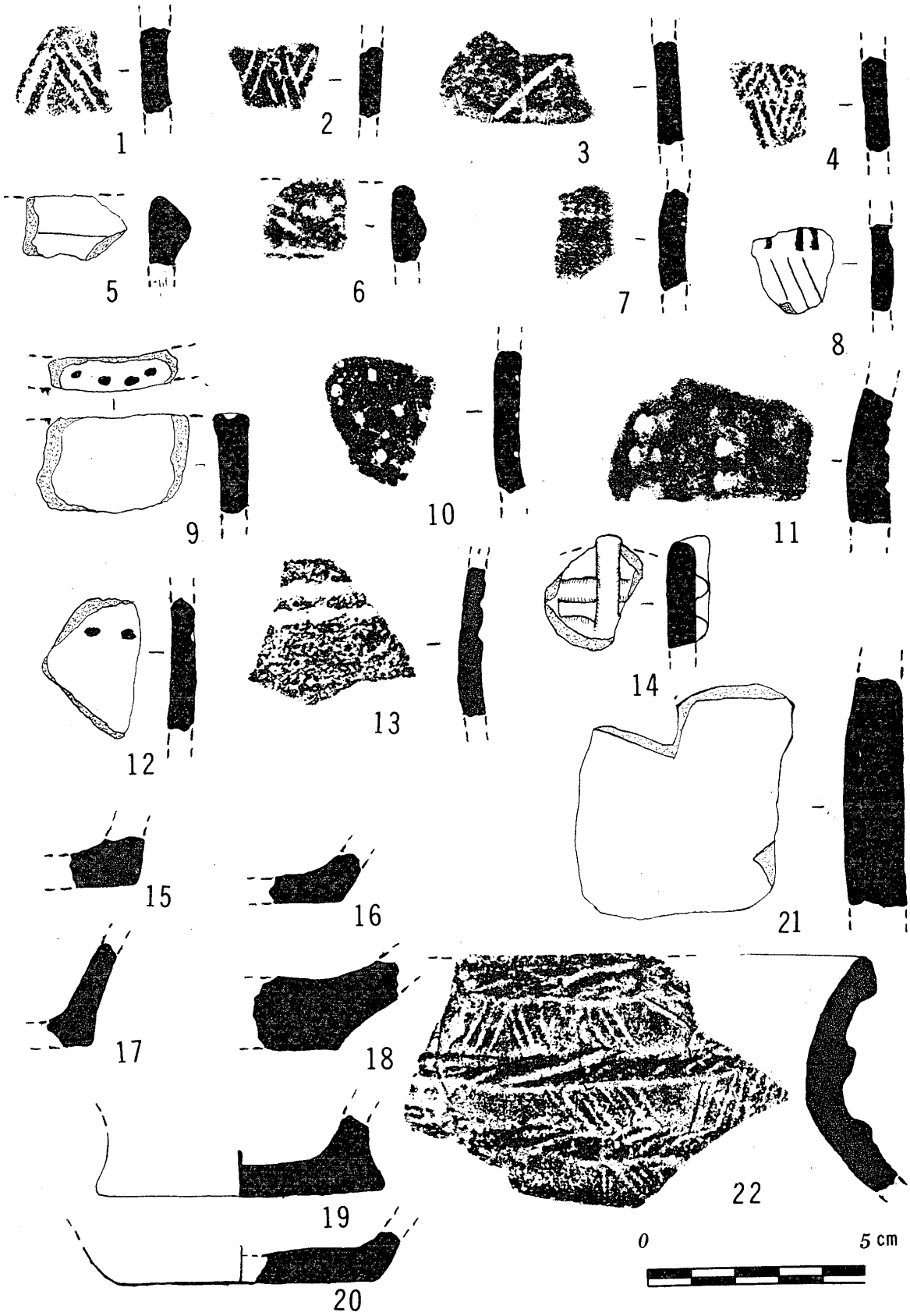
以上、土器と石器について説明した。土器を見ると奄美的文様を有する土器が多く、沖縄諸島においては浦添貝塚に次ぐ二番目の奄美資料であるが、遺跡がすでに破壊され、発掘調査が行なえなかったのは残念である。

奄美と沖縄の先史（新石器）時代前期における土器の対応関係については、タイポロジカルな類似から幾つかの想定が提示されているが、層位的には、まだおさえられていない。

本地点では多量の奄美的土器の中に熱田原式土器が若干混って発見されたが、表採資料であるために両者の共伴関係を知ることはできなかった。

ところで本地点の編年については、面縄東洞式や熱田原式の出土によって、おおよその上限はおさえられる。また、前述の土器には宇佐浜式が1点混っていたが、宇宿貝塚の状況からすると、この土器は本地点の下限を示す資料として使用しうるかと考える。

奄美的文様を有する本地点の土器についてみると、奄美で設定された土器型式に符合するものは少く、大部分はそれからずれたような文様を有し、その点ではむしろ浦添貝塚の土器に共通する点が多い。以上の特徴は浦添発見の新しいタイプの市



第７図　C・D地点採集遺物
〔1～21＝C地点、22＝D地点〕

来式土器と共に時間差を示すものと考えられるが、これについては、さらに資料を得た上で検討したい。

III）D地点

（A）遺跡の概況

D地点はA－C地点の存する丘陵の北端部に位置し、標高は約8m.、遺物は丘陵斜面部で採集できる。本地点も前記各地点同様採石による破壊が著しい。斜面に堆積している黒褐色土層に1m.四方の試掘ピットを設け、調査を行った。遺物包含層は西壁で30cm.，東壁では数cm.と急に薄くなり、西から東へ傾斜している。基盤はマージの地山である（第10図）。 遺物の埋蔵量は少く、土器片2個を得たのみで、貝殻や獣魚骨は見当らなかった。したがって、本地点の資料も表採品が主体となるが、石器・骨器・貝器は未発見である（第1図およびPL.1の1）。

（B）出土遺物

ここに紹介する土器は上記発掘資料の他、当真嗣一氏提供のもの、および1973年以降われわれが採集したものである。

a）土　器

土器はすべて破片で、口縁部有文1個、無文胴部97個である。

第7図22（PL.4の30）は口縁の外反が著しいもので、口径約16cm.，口縁部から頸部にかけ3条の凸帯を横位に貼付し、凸帯にもラフではあるが鋭い刻目を施している。凸帯は頸部に文様を施した後貼付したもので、頸部には数本の沈線を単位とした鋸歯文が施され、文様は下方の凸帯をこえて胴上部におよんでいる。沈線は比較的シャープで、単箆によって描かれている。胎土には1mm.前後の石英を多量に混入し、雲母も僅かながらみられる。手ざわりはざらざらし、擦痕は見受けられない。当真氏による表採品である。

他は無文胴部の小さな破片である。色調は暗褐色を呈し、まれに赤褐色のものも見られる。焼成は一般的に悪く、混入物としては微細な砂粒、1mm.前後の砂粒、石英を含むものがある。器壁の厚さは4～7mm.である。土器の胎土を見ると、沖縄的なものと奄美的特徴を示すものがあるが、量的には前者の方が多い。

b）結　び

第7図22の口縁破片は文様、施文手法、焼成、色調等奄美の面縄前庭式（註5）と一致する。ただ、奄美では凸帯が口縁部と頸部・胴部の堺に2本施されているのに対し、本地点のものは、両凸帯間にさらに1本加え、計3本となっている。これが地域差を示すものかどうか、今後の資料に俟ちたい。

IV．E地点

（A）遺跡の概況

本地点（第1図・PL.1の2）は隅原遺跡群の中では最北端（A地点の北西約200m.）の海岸近くの台地上に位置し、すぐ近くに水源（湧泉）がある。他の地点同様採石による破壊が著しく、採石後の壁面に包含層がわずかに残っているだけである。

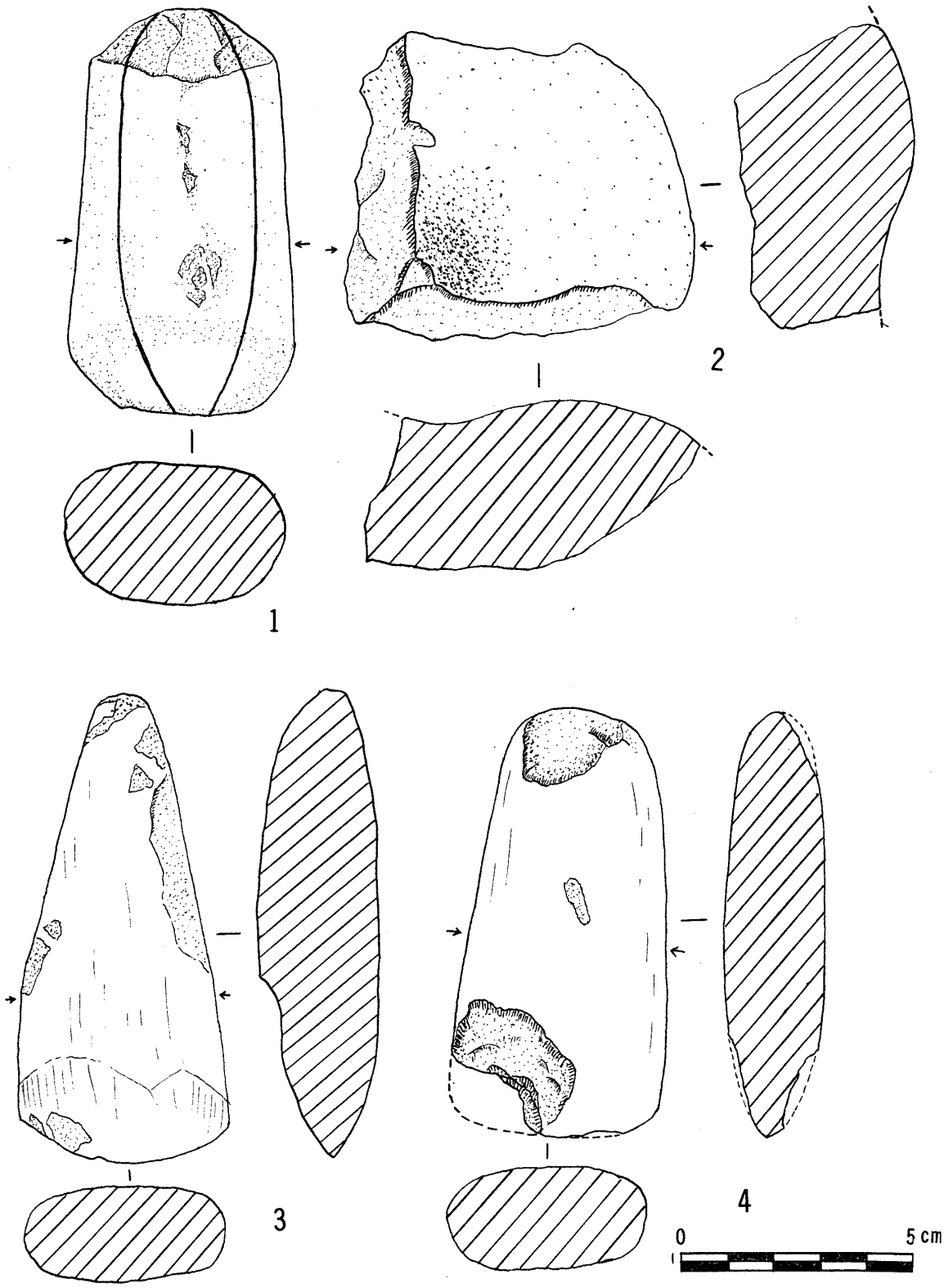
この包含層は厚さ1m.程度の暗褐色土層で、表土（石灰岩礫混りの赤土）との間に厚さ約1cm.の鉄板の混入が見られ、その鉄板の層を境に表土と包含層が明確に区別できる。以上の状況から包含層の上部は採石の時点で削り取られたことがわかる。更に、包含層の下方約3m.のところにも遺物を含む黒色の堆積土がみられるが、前述の包含層の崩れ落ちたものであろう。本地点の包含層で注目すべきことは、土器や石器などの人工遺物はみられるが、貝や獣魚骨などの自然遺物が全くみられないということである。

（B）出土遺物

今回は表面調査だけにとどめた。以下、採集した土器や石器について記述するが、本学考古学研究会の採集資料も参考資料として加えた。

a）土　器

土器片総数93片、そのうちわけは口縁部11片（有文9片）、胴部81片（有文2片）、底部1片で



第8図　C地点その他採集遺物

〔1、2＝C地点、3＝隅原遺跡(地点不明)表採石斧、4＝昆布部落内表採石斧〕

第3表　E地点出土土器集計表

土器 / タイプ	口縁部		胴部		底部	計	比率(%)
	有文	無文	有文	無文			
第Ⅰ類	6	2	1	67	1	77	82.8
第Ⅱ類	2	0	0	5	0	7	7.5
第Ⅲ類	1	0	1	7	0	9	9.7
第Ⅳ類	0	0	0	0	0	0	0
第Ⅴ類	0	0	0	0	0	0	0
計	9	2	2	79	1	93	100

ある。破片が些細なため全形を復原することは不可能であるが、口縁部の形態から推してほとんどが甕形である。土器を第Ⅰ表の分類基準にしたがって分類すると、第Ⅰ類77片、第Ⅱ類7片、第Ⅲ類9片という結果がでた。そのことから本地点の主体をなす土器は第Ⅰ類（全体の約83%）ということがわかる。

以下、各土器について記述するが、器面の磨耗が著しいために拓影のとれなかったものについては図で示した。

沖縄の土器

1．熱田原式土器

第9図10（PL.5の4）は傾斜のゆるい山形口縁の破片で、叉状工具による沈線を横位に施文しているが、器面が著しく磨耗しているため、下方の沈線は消えかかっている。したがって擦痕の有無は不明。色調は茶褐色で焼成は悪い。器厚は約6mm.，口径不明。第1表の第Ⅰ類土器である。

2．熱田原第Ⅱ類土器

熱田原貝塚で第Ⅱ類としたもので、型式名はついてない。

同図1（PL.5の1）に示したもので、山形口縁の一部かと考えられ、口縁に沿って幅4mm.，深さ2mm.の押捺刻文が施こされている。色調は茶褐色を呈し、焼成、器面調整ともによく、表裏に浅いやや荒目の過擦痕がみられる。器厚は約8mm.口径不明。第1表の第Ⅰ類土器である。

3．大山式土器

同図2（PL.5の2）に示すものは、押引きによる押捺刻文を口縁に沿って施している。焼成は悪く、器面もだいぶ磨滅し、擦痕の有無は不明である。器厚は約6mm.，口径は不明。第1表に示した第Ⅰ類土器である。

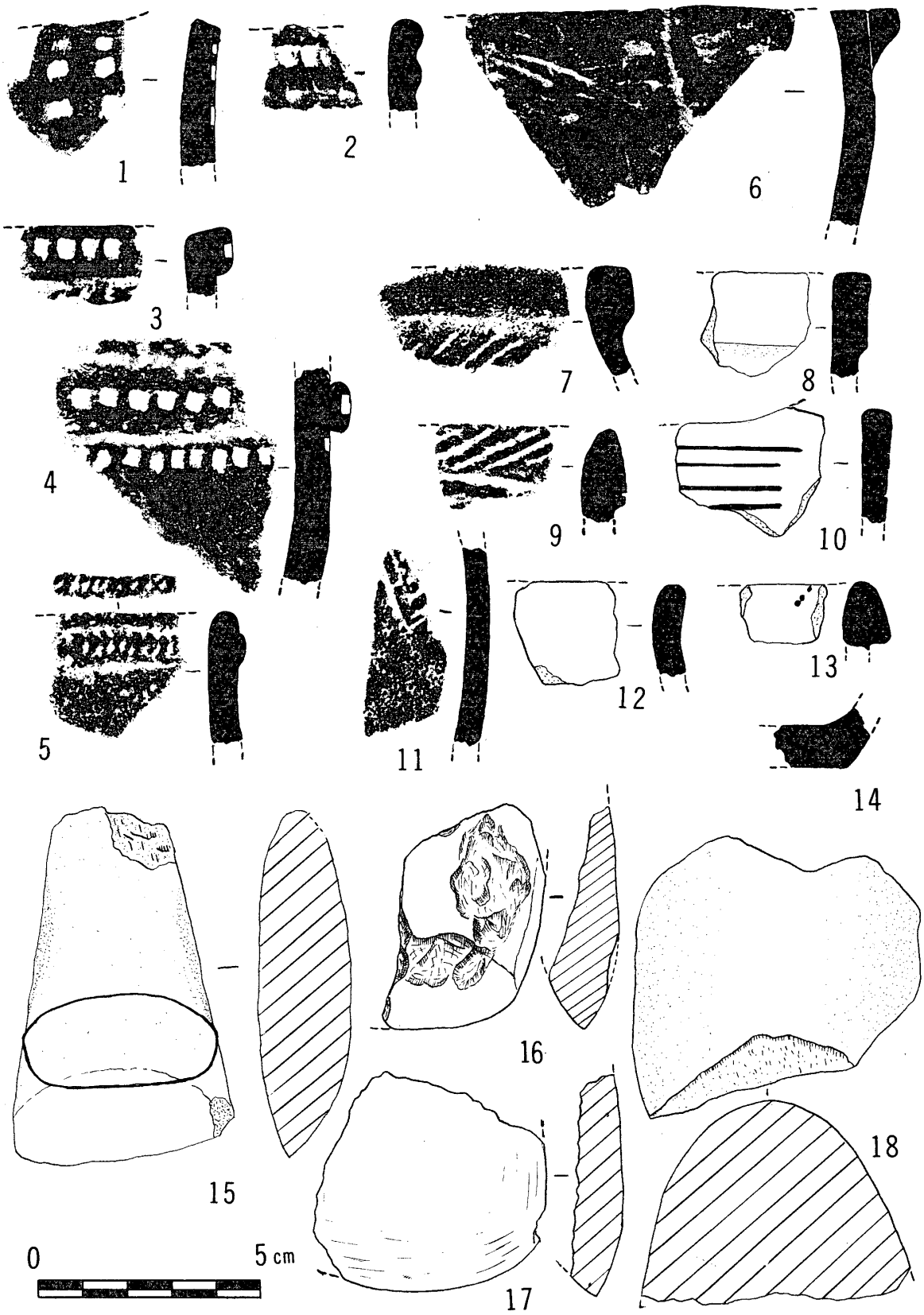
4．カヤウチバンタ式土器

同図8（PL.5の7）は口縁部断面が歯ブラシ状の肥厚を示すカヤウチバンタ式口縁で、肥厚部の幅は15mm.，厚さ8mm.である。色調は暗褐色を呈し、器面をわりと保持している。器表面に浅い擦痕がみられる。器厚は約5mm.，口径不明。第1表の第Ⅰ類土器である。

5．肥厚口縁土器

同図3（PL.5の5）に示すものは口縁部に凸帯を貼付して肥厚させたもので、肥厚部とその下方に押捺刻文を施す。器色は茶褐色を呈し、焼成よく器面をわりと保持している。器厚は約7mm.，凸帯の厚さは約4mm.，口径は不明。第1表の第Ⅰ類土器である。

同図6（PL.5の3）も口縁部に粘土帯を貼付して肥厚させたもので、口唇部に貼付時の接合面がはっきりあらわれている資料である。肥厚部の下方に不規則な沈線が斜めに施こされている。器色は外面は暗褐色、内面は茶褐色を呈し、焼成よく器面を保持している。擦痕はみられず、口唇



第９図　Ｅ地点表採遺物

部の幅は約14mm.，器厚は約7mm.である。口径は約20cm.で、第1表の第I類土器である。

同図7（PL.5の6）は口縁部の断面が方形の肥厚をなし、肥厚部の下方に沈線が斜めに施こされている。色調は赤褐色であるが、肥厚部の一部に暗褐色を呈する箇所がある。器面の保存状態が悪く、テンパーが露出し、擦痕の有無は不明。器厚は約5mm.，口径は不明。第1表の第II類土器である。

6．凸帯を有する土器

同図4（PL.5の10）に示したものは、胴部破片で、幅約11mm.，厚さ約5mm.の粘土帯を貼付し、凸帯及び凸帯の上下に押捺刻文を施している。器色は茶褐色を呈し、焼成よく器面をわりと保持している。表面の一部に浅い過擦痕がみられ、器厚は約7mm.，胴径は約10cm.。第1表の第I類土器で、同図3（PL.5の5）と同一個体かもしれない。

7．無文口縁

同図12（PL.5の8）は口縁のわずかに外反する甕形土器の破片で、器色は暗褐色を呈し、焼成はやや良く、器面を保持している。擦痕はみられず、器厚は約5mm.，口径不明。第1表の第I類土器である。

8．条痕文土器

第14図1に示したものは、本地点最大の胴下半部の資料で、器形は不明だが表裏に貝の腹縁部による条痕がみられ、器表面は縦位に、裏面は横位に施されている。沖縄諸島では類例の少ない資料である。器色は赤褐色、焼成よく堅緻である。表面には粘土帯接合部の膨みが数ヶ所見られる。器厚は約7mm.で、接合部は約9mm.である。胴径は約15cm.第1表の第I類土器である。

9．底　部

第9図14は平底の破片で、厚さ約8mm.，底径は不明である。器色は茶褐色、焼成悪く脆弱で、擦痕の有無も不明。器壁の厚さは約6mm.，第1表の第I類土器である。

奄美的土器

1．類市来式土器

第9図13（PL.5の9）は口縁部の断面が三角形の肥厚を示し、肥厚部に貝殻文とみられる文様が斜位に施されているが、下まで及ばず、G地点のものほど密でなく雑である。肥厚部直下で破損し、口唇部は丸味をおびている。器色は茶褐色、器面は磨耗し、擦痕の有無は不明である。器厚は肥厚部最大で10mm.，口径は不明。第1表の第III類土器である。

同図9（PL.5の12）は肥厚口縁の破片で、肥厚部にシャープな斜沈線と、その下方に横位の沈線を1条施している。表面は黒褐色、裏面は黄褐色を呈し、焼成よく器面も原形を留めているが擦痕はみられない。肥厚部の幅は約16mm.，器厚は約6mm.，口径は不明。第1表の第I類土器である。

2．斜沈線文土器

同図11（PL.5の11）は胴部の破片で、斜沈線を組合わせた文様の下端部が僅かに残っている。器色は赤褐色を呈す。器面の保存は悪くテンパーが露出し、擦痕の有無は不明。器厚は約5mm.，第1表の第III類土器である。

3．面縄前庭式土器

同図5（PL.5の13）は口縁に沿って凸帯が1条認められ、凸帯に先端が叉状になった工具でハの字状の文様を横位に施文する。口唇部にも刻目を施す。焼成悪く、器面はだいぶ磨耗し、したがって擦痕の有無は不明。器面は茶褐色，胎土中央部は黒色を呈す。器厚は約6mm.，凸帯の厚さは約2mm.，口径は不明。第1表の第III類土器である。

b）石　器

本地点の石器は10個で、完形品も得られた。器種、石質、その他については第4表に示したが、器種の判別できるのは石斧とすり石だけである。

1．石　斧

3個得られ、いずれも磨製の片刃的両刃石斧である。

第9図15（PL.7の1）は黒っぽい硬砂岩製の完形の磨製石斧で、背面は扁平、上面はやや丸味をおび、刃部は片刃的両刃である。全面よく研磨され光沢がある。

同図16（PL.7の2）は輝緑岩粒を含んだ砂岩製の磨製石斧の刃部破片で、一面はかなり破損し

第4表　E地点出土石器集計表

	図番号	器　種	石　質	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
1	第8図 15	磨製石斧	硬砂岩	7.9cm.	頭2.7cm. 刃 5cm.	2cm.	110g.	完　形
2	16	磨製石斧	砂　岩	5cm.	3cm.	1.4cm.	30g.	破　片
3	17	磨製石斧	未同定	5cm.	5cm.	1cm.	34g.	破　片
4	18	すり石	細粒砂岩	6cm.	4cm.	6.5cm.	159g.	破　片

※2.3.4.はいずれも破片で、残存部の最大値を示した。

ているが、他面は比較的製作時の状況を留め、写真に見えるように打欠痕の消えきってない箇所もある。刃部の形態は片刃的両刃である。

同図17も磨製石斧の刃部破片で、石質は未同定である。背面は欠損、表面はよく研磨され光沢を有する。片刃的両刃の石斧かと思われる。

2．すり石

同図18（PL.7の3）はすり石の一種で、細粒砂岩が用いられている。研磨が徹底していて器面は非常になめらかである。

3．その他

一部に研磨面を有するものが6片あるが、小破片のため器種は不明である。

また、チャートの欠片が1片包含層中より採集されたが、注目すべき資料かと思われるので、ここに記しておく。

（C）結　び

以上、土器と石器について簡単に述べた。次にこれらの遺物について若干の考察を試み、結びとしたい。

まず土器であるが、第9図10は山形口縁に二条平行線が施されたもので、熱田原貝塚に類例（註9）がある。熱田原期のものであろう。同図1の山形口縁に押捺刻文を施したものは荻堂貝塚（註10)、嘉手納貝塚（註12)、熱田原貝塚（註9）などに出ているが前二者の貝塚に多い。同図2が平口縁だとすると、大山第II類土器（註13）の時期に比定できるかと思う。

同図6、7は肥厚口縁土器の一種であるが肥厚部に文様はなく、下方には斜沈線を施す。大山貝塚の第III層以後のものかと考えられる。

同図3、4は同一個体と思われ、口縁の肥厚の状況及び胴部の文様形態からとすると、大山貝塚の第II層より古くなることはないだろう。横走の凸帯と押捺刻文の組み合わされたものはシヌグ堂貝塚（註14)、天久遺跡（註15）などで出土している。

同図8はカヤウチバンタ式口縁で、大山貝塚では第IV層に出土した。

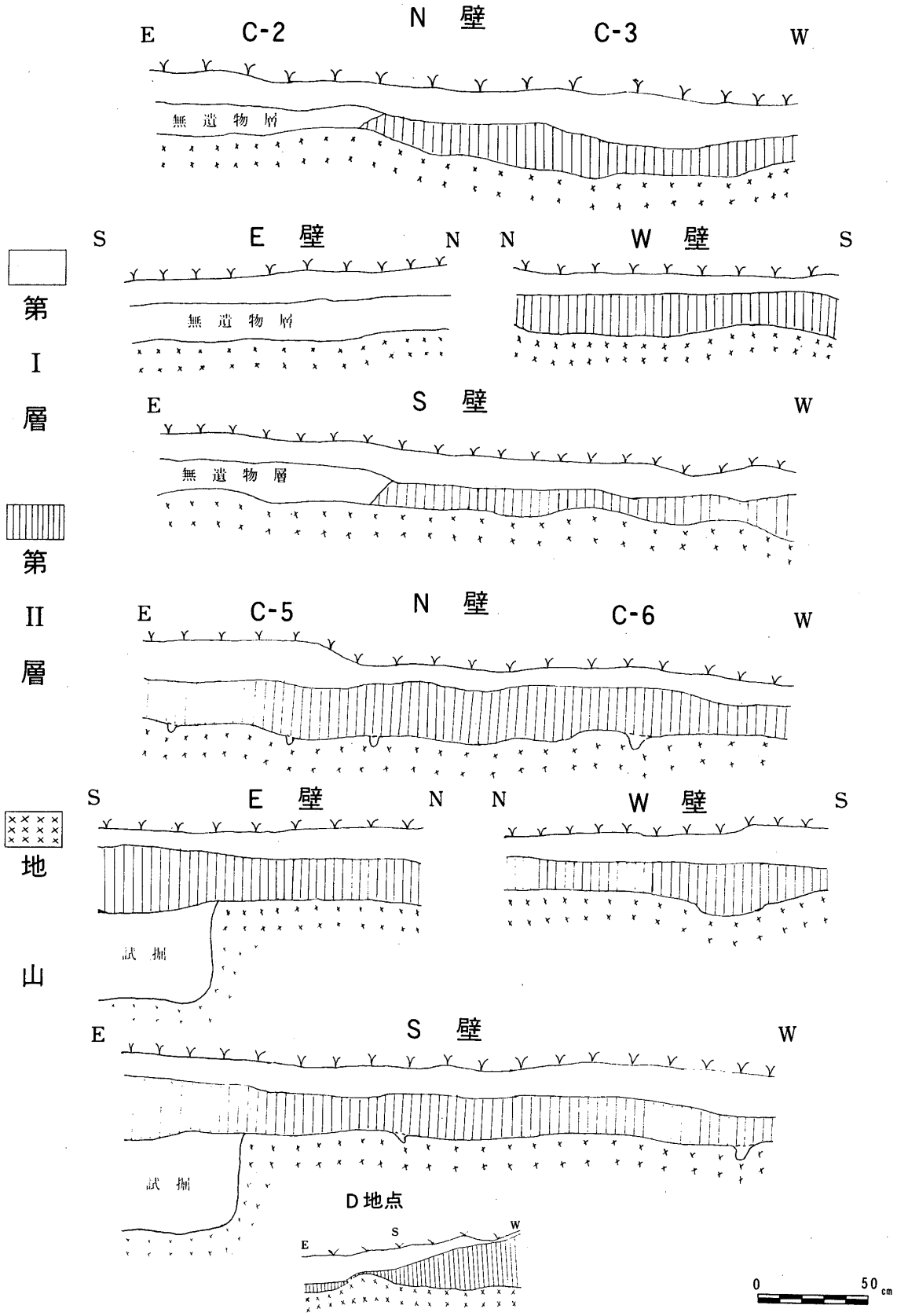
同図13は肥厚部に貝殻文を施すもので、浦添貝塚においては市来式土器との共伴（註16）が知られ、市来式土器の影響をうけたものと考えられている。本地点の上記土器は施文が雑になり、時期の下るものと思われる。同図9は肥厚部にシャープな斜沈線を施文するもので、貝殻の腹縁によって同種の文様を施す例は浦添貝塚で2例（註16)、隅原遺跡G地点で5例（後項）知られている。おそらく後者から派生した文様かと思われる。

同図11は胴部の破片であるが、浦添貝塚の第III類土器(註8）のグループに属するものであろう。

同図5の凸帯文土器は浦添貝塚の表採品(註8）に類例があるが、浦添貝塚の資料は口唇部に刻目がない。

奄美において凸帯文が出現するのは、河口貞徳氏の分類（註5）に従えば面縄西洞式以後のことであるが、文様、凸帯、器面の状況からすると、面縄前庭式の口縁破片と思われる。

同図14は沖縄諸島に見られる前期の平底である。



第10図　D・F地点pit 側壁図

第14図１は胴下半部の資料で、表裏に条痕を施す。沖縄諸島では出土例の少ない資料である。

石器では３点の石斧を得たが、いずれも磨製の片刃的両刃石斧である。しかしながら表採品であるため、前記土器との共伴関係は不明である。

以上に述べた本地点採集の土器には、沖縄諸島にみられる土器の他に、奄美諸島に分布する土器が含まれている。

沖縄諸島の土器には前期前半末を代表する熱田原式土器を最古として、新しい方では前期後半末のカヤウチバンタ式土器が含まれ、おおよその時期を設定することができる。

第９図11の斜沈線を組み合わせた文様は、奄美の資料についてみると、嘉徳Ⅱ式や面縄前庭式に見られるが、焼成や器面の特徴からすると、同図５とともに面縄前庭式に属する資料かとみられる。同図９の口縁肥厚部に斜沈線を施す資料は、前述のように貝殻文からの転化と考えられる。以上の奄美系土器はほぼ宇宿下層の時代に相当するが、上限は若干ずれるものと思われる。

さて、以上の土器はすべて表採資料であり、これらの土器の共伴関係をおさえることができなかったのは残念であるが、本地点には末だ包含層が残っており、発掘を実施すれば、共伴関係についての資料が得られるかもしれない。

Ⅴ）Ｆ地点

（Ａ）遺跡の概況

本地点はＡ地点の南東約250ｍ.、通称１本松と呼ばれている地域の畑地内にあって、標高約35ｍ.の台地上に形成されている。この一帯はかって軍用地として米軍に使用されていたが1971年に解放され、以後農地となっている。遺跡は、糸満盛善氏の小作地内にある（第１図およびＰＬ.１の１）。

（Ｂ）発掘経過

隅原の調査はまず、本地点で開始され、７月12日トレンチの設定を行い、７月15日までの４日間発掘を行った。本地点は小規模の暗褐色土からなり、最初は赤犬子遺跡で推定されたような家族単位の遺跡かと考えたが、附近に包含層は認められなかった。調査はこの暗褐色土の部分を中心に東西方向に1.5ｍ.四方の６ピットを設け、東端より、Ｃ－１、Ｃ－２……Ｃ－６の番号をつけ、今回はＣ－２、Ｃ－３、Ｃ－５、Ｃ－６　の４ピットにおいて調査を行った。発掘に際しては10cm.ごとに掘り下げたが、遺物包含層の上部は耕作のため攪乱を受けていることが予想できた。層序は２層からなり、第Ⅰ層は暗褐色土層、第Ⅱ層は黒色土層で遺物は他地点に比べ比較的多かったが、両層において土器、石器の先史遺物と共に釘、ビニール、コンクリートの破片、ガラス、レンガ、鉄滓、瓦、ボタン、磁器、陶器等の後代遺物もかなり検出された。また第Ⅱ層最下部と地山の接点においてはトラクターのスキ跡があり最下部まで攪乱されていることが分った。更に地山を再確認する意味でＣ－５ピットにおいて南東角を更に86cm.掘り下げたが遺物包含層は見受けられなかった。

（Ｃ）出土遺物

本地点の遺物は、自然遺物と人工遺物に分けられる。自然遺物としては貝殻、マイマイ類、自然礫、獣骨等がわずかにみられ、人工遺物としては石器、土器等の先史遺物の他に前述のような後代遺物も見られた。

ａ）自然遺物

本地点の自然遺物は、貝殻34個（海産11個、陸産15個、アフリカマイマイ８個）、獣骨片１個、自然礫 242個で両層において出土した。自然礫は、砂岩が最も多く60個、石英54個、泥岩27個、千枚岩13個、石灰岩10個、輝緑岩８個、　褐鉄鉱４個、不明66個である。貝殻、獣骨片は未同定で後日報告することにする。

ｂ）人工遺物

今回の調査で石器と土器を得たが前者は少なかった。

(1)　土　　器

本地点の土器はすべて小破片で、復元可能の破片は得られなかった。総数 532 個（含表採品）で、そのうち口唇部に文様を有する土器が３個、胴部

遺物 ＼ 層序(ピット)				C－2 第I層	C－2 第II層	C－3 第I層	C－3 第II層	C－5 第I層	C－5 第II層	C－6 第I層	C－6 第II層	計
人工遺物	土器	口縁部	有文	0	0	0	1	0	2	0	0	3
			無文	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		胴部	有文	0	0	0	1	0	0	0	0	1
			無文	3	49	27	116	29	132	0	62	418
		底部		0	0	0	1	0	1	0	0	2
	石器	石斧片		0	0	0	1	1	0	0	1	3
		石器片		0	0	0	3	0	1	1	4	9
		石材片		0	1	1	2	0	0	0	0	4
	後代遺物	陶器		0	4	0	2	1	0	0	0	7
		磁器		0	1	0	1	0	0	0	0	2
		瓦片		0	0	0	0	0	0	1	0	1
		レンガ		0	1	0	0	0	0	0	0	1
		ガラス片		0	1	0	0	0	0	0	0	1
		コンクリート片		0	0	0	1	0	0	0	0	1
		クギ		0	3	0	5	1	1	1	3	14
		鉄滓		0	0	0	2	0	0	0	0	2
		ボタン		0	0	0	0	0	0	0	1	1
		ビニール片		0	0	0	3	0	0	0	0	3
自然遺物	貝殻		陸産	0	15	0	6	1	1	0	0	23
			海産	0	8	0	3	0	0	0	0	11
	骨			0	0	0	0	0	0	0	1	1
	自然礫			1	39	5	48	13	71	3	62	242

第5表　F地点出土遺物集計表

に凸帯を貼付する土器1個、底部が2個、無文胴部526個であった。

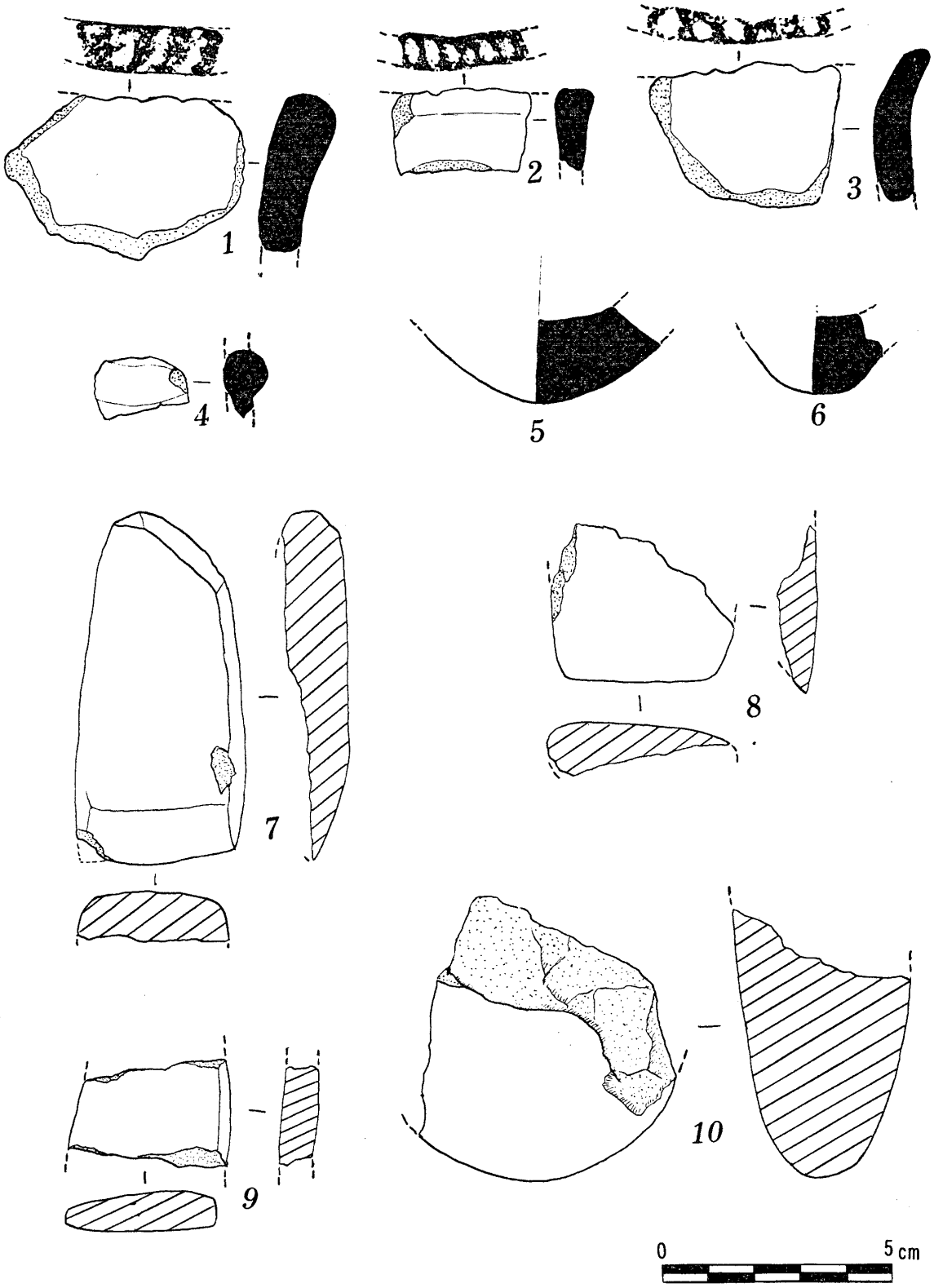
本地点出土の土器は焼成が悪く全体的に厚ぼったく、その点で他の地点出土の土器と異なっている。第I表の分類でいくと、第III類のタイプ（砂質）と第IV類の泥質タイプに大別されるが、後者が圧倒的に多い。次に両タイプについて記す。

（ア）第III類土器

これに属する土器破片は84個あるが、文様を有するものや、口縁部、底部破片はなくすべて無文胴部の破片で器形の全形を知りうるような資料はない。一般に器面には混入物が露出し、器面調整がラフなため、手ざわりはざらざらしている。焼成は悪く器色は茶褐色を呈するものが多いが、暗褐色のもの、黒褐色のもの、赤褐色のものなどが僅かながら含まれている。以上の破片を胎土に含まれるテンパーの多寡で見ると石英や砂粒を比較的多量に含むもの(IIIa)と混入量の少ないもの(IIIb)に細分できる。

IIIaに属するものは20個で一般的に器壁は厚い今、器壁について見ると、8～9mm.3個、9～10mm.3個、10～11mm.6個、11～12mm.3個、12～13mm.1個、13～14mm.3個、16～17mm.1個となっていて、10mm.以上のものが17個もあって、全体の77%を占める。しかし極端に厚いものは底部の破片かと考えるが、破片が小さく確認は困難である。

IIIbに属するものは64個で前者に比べると若干器壁は薄い、すなわち、4～5mm.7個、5～6mm.



第11図　F地点出土遺物

5個、6～7mm・9個、7～8mm・13個、8～9mm・5個、9～10mm・9個、10～11mm・4個、12～13mm・12個で4mm・以下、13mm・以上はなく9mm.以下のものが圧倒的に多い。このⅢbの中に1片だけではあるが角閃石を少量含むものがあった。

（イ）第Ⅳ類土器

第Ⅳ類土器に属する土器破片は、448個で前記砂質土器の5倍も含まれ、本地点の主体をなす土器と考えられる。器色は黄褐色のものが多く、暗褐色を呈するものが少量ある。焼成は悪く極めて脆弱で吸水性は高い。器壁は一般的に厚く、胎土の粒子は細かで石英や砂粒を含むものがあるが後者は少ない。胎土に含まれるテンパーの混入量の多寡で見ると比較的多量に含まれるもの(Ⅳa)と少量含むもの(Ⅳb)に細分できる。破片はいずれも小さく全形を復元しうるようなものは得られなかったが、口縁部破片が3片含まれ、いずれも甕形土器の口縁破片である。また底部破片が2個あり、それぞれ丸底と尖底器形を示している。以上の他に凸帯を貼付する破片が1個あった。

（i）口縁部

第11図1、2、3（PL.5の14、15、16)の3個は口縁部が直口または若干外反を示す甕形土器で口唇部には刻文が施されている。頸胴部は無文である。いずれも小破片のため口径を知りえない。口唇部のみに刻文を施す例は極めて少なく、中期の平安名第二貝塚(註17) 天久遺跡（註15）幸地原貝塚（註18）等で報告があるが出土量は極めて少い。前記分類でいえばⅣbタイプに属する。第11図4（PL 5の17)は幅5mm・前後の凸帯を横位に貼付したもので凸帯の断面は蒲鉾状をなす。前記の分類に従えばⅣaタイプに属する。

（ii）底　部

第11図5、6の2個で、丸底と尖底の破片である。器色は暗褐色を呈し、15～16mm.の厚さを有している。第11図5の丸底はⅣbに属し、同図6のの尖底はⅣaタイプに属する。

（iii）無文胴部

無文の胴部破片が胎土混入物の多寡によって細分できることは前に記した。この細分がどのような意味をもつか今直ちに結論は得られないが当分観察を続けたいと思う。混入量の多いⅣaタイプの土器片は56個である。混入物は石英や砂粒で器面に露出し、粒も大きい。器壁の厚さは4～5mm・1個、5～6mm・3個、6～7mm・7個、7～8mm・7個、8～9mm・6個、9～10mm・14個、10～11mm・4個11～12mm・9個、12～13mm・3個、16～17mm・1個、18～19mm.1個となっている。極端に厚いものは底部の破片かと思われる。

Ⅳbに属する胴部は386個で前者の約7倍であ

第6表　F地点石器集計表

番号	用　途	石　質	最大長（cm.）	最大巾（cm.）	厚　さ（cm.）	重　量（g.）
1	石　斧	輝　緑　岩	7.6	3.6	3.1	70
2	〃	千　枚　岩	3.6	4.1	1.0	20
3	〃	〃	2.1	3.3	0.9	10
4	磨　り　石	安　山　岩			3.3	175
5	不　明	砂　岩				180
6	〃	〃				130
7	〃	〃				120
8	〃	〃				80
9	〃	〃				50
10	〃	〃				45
11	〃	〃				40

※遺物は残存部を計測

る。器厚の計測可能な 308個について見ると、4～5 mm.17個、5～6 mm. 25個、6～7 mm. 34個、7～8 mm.65個、8～9 mm. 48個、9～10mm. 46個、10～11 mm.37個、11～12mm. 14個、12～13mm.13個、13～14mm. 2個、14～15mm. 3個、15～16mm. 4個となっているが、前者同様極端に厚いものは底部ないしは底部に近い部分と思われる。

(2) 石　　器

本地点採集の石器は11点で完形品がなく用途の判別できるものは石斧と磨り石の二種（4個）だけである。

（ア）石　斧

第11図7、PL. 8の1（表6の1）の石斧は輝緑岩製で、表面は原形を留めているが背面を欠損し、そのため刃部の形態は不明である。横断面は残存部からすると隅丸の長方形かと思われる。

同図8、PL. 8の2（表6の2）は刃部の資料で、頭腹部を欠く。刃部の形態は両刃もしくは片刃的両刃であったかと思われる。千枚岩製である。

同図9、PL. 8の3（表6の3）は頭部と刃部を欠くため全形は窺えないが、残存部から見て定角石斧の破片かと思われる。石質は千枚岩である。

（イ）磨り石

同図10、PL. 8の4（表6の4）は石鹸状の磨り石の破片と考えられるもので、安山岩製である。

（ウ）その他

他の7点は研磨痕を有する小破片で、器種は不明である。石質は7点とも砂岩である。

（D）考　　察

以上F地点出土の資料について簡単に述べた。石器は11個の発見があったが用途の判明するものは石斧と磨り石だけであった。磨り石は石鹸状を呈すると思われ、石斧は横断面偏円形のものと定角を示すものが得られたが、後者の出土例は沖縄諸島において少なく注意しておきたい資料である。土器は小破片ばかりで復元しうるような資料はなく、口縁部や底部破片、文様を有する破片も少なかった。

これらの土器片を胎土、焼成、色調、混入物等の特徴から第III類と第IV類の二種に分けたが、後者が圧倒的に多かった。器形について見ると、直口もしくは口縁が若干外反する尖底あるいは丸底の甕形かと推察される。　口縁部に文様を有するものは発見されてなく、文様は口唇部に限定されている。口唇部のみに施文する例は前述のように天久、幸地原、東ハンタ原（註19）遺跡等にも見られるが出土量は極めて少ない。

以上の特徴から本地点の土器は無文化のかなり進んだ段階のものと考えられ、幸地原貝塚に後続する時期のものかと考えられる。

VI、G地点

（A）遺跡の概況

本地点はE地点の南側約60m.の箇所に位置し、採石後の壁面に包含層が露出している。

海抜約7～9 m.で基盤の石灰岩の凹地に、壁面に向かって縦約3.4m.、横約7m.の包含層が孤状に堆積している。包含層は凹地の中心部より両サイドにいくにしたがって薄くなっている。

壁面に見られる層序は3層からなり、I層（表土層）は赤色土層で厚さ約1m.、II層は黒褐色土層で最も厚い所で約1.6m.あり、下部において土器が多く確認できた。III層は赤褐色土層で厚さ約1m.、II層と同様、下部において土器が多く確認出来た。III層下は基盤の石灰岩である第1図（PL. 1の1）。

本地点は調査終了後に発見されたため表採にとどめたが、前述のような未攪乱層の存在が確認され、奄美との関係を追求する上で有望な遺跡だと思われる。

（B）遺　物

本地点の遺物は土器、石器、チャートの欠片等で、壁面に露出しているかぎりでは獣魚骨等の自然遺物は見られなかった。以下採集遺物について説明する。

a）土　器

土器は地表および壁面にみられる黒褐色土層（II層）と赤褐色土層（III層）に露出していたも

のを採集した。まず壁面採集のものについて述べ、次に表採品について説明する。奄美様式の土器については奄美の型式名を使用した。なお器面の磨滅が著しいため、拓影のとれないものは図でしめした。

一、黒褐色土層（II層）

黒褐色土層採集の土器は総数14個で、その内訳は有文8個（口縁5個、胴部3個）、無文5個(胴部)、底部1個で、数種のタイプが含まれている。

奄美的土器

1．類市来式土器

12図18（PL.6の13）は肥厚部の断面が三角形をなすもので、肥厚部に左傾の貝殻文を施し、肥厚部下に浅い斜沈線を施文する。色調は褐色砂粒を含み、胎土の粒子は粗く、焼成は悪い。類例は浦添貝塚（註16）で1個検出されている。

2．面縄東洞式土器

12図15（PL.6の12）は口縁肥厚部を文様帯と

第7表　G地点出土遺物集計表

遺物／層序	土器							焼土	石器		チャート	合計
	口縁部		胴部		底部				円形石斧	石器片		
	有文	無文	有文	無文	平	尖	丸					
表採品	5	0	6	20	0	0	0	3	4	1	1	40
黒褐色土層(II層)	5	0	3	5	0	0	1	0	1	6	0	21
赤褐色土層(III層)	9	0	30	70	1	1	1	2	0	0	1	115
計	19	0	39	95	1	1	2	5	5	7	2	176

第8表　G地点発見の土器

種類／層序		表採品	黒褐色土層(II層)	赤褐色土層(III層)	計
沖縄の土器	熱田原式（それに準ずるものを含む）	3	0	3	6
	凸帯文土器	1	0	0	1
奄美の土器	類市来式	2	1	3	6
	面縄東洞式	0	1	0	1
	沈線文土器	3	3	27	33
	面縄前庭式	2	3	2	7
	肥厚口縁土器	0	0	1	1
その他の文様		0	0	3	3
底部	平底	0	0	1	1
	尖底	0	0	1	1
	丸底	0	1	1	2
無文胴部		20	5	70	95
合計		31	14	112	157

※上記各型式には同型式に準ずるものも含めた。

し、かなり磨滅しているが、横位の爪形文が3条認められる。口唇部は尖らず平担に整形されているが、文様は施されない。石英を多量に含む脆弱な土器で、胎土の粒子は荒く、色調は黒褐色。面縄東洞式に属する資料かと思われる。

3．沈線文土器

沈線文土器は3個得られた。

12図16、17（PL.6の17、16）は単箆の工具で沈線を施したもので同図16には5本の斜沈線、17には縦位と横位に近い斜沈線が認められる。沈線はいずれも浅い。器壁は薄く、石英を多量に混入し、色調は前者が茶褐色、後者が暗褐色で、焼成は比較的良好である。

同図19（PL.6の18）は単箆による沈線であるが、前記の17、18にくらべ磨滅が著しく、文様もかなり消えかかっている。焼成は悪く、色調は茶褐色を呈し、器壁は薄い。

4．面縄前庭式土器

凸帯文を横位に貼付する土器が3個得られた。

12図12（PL.6の11）は外反の著しい、甕形口縁破片で、頸部に凸帯を一条めぐらし、口唇部と凸帯にそれぞれ半截竹管状の工具で刻目を施し、凸帯下に斜沈線を施している。この破片の大きさからすると頸部は無文のようである。色調は茶褐色を呈し、焼成は良く、比較的堅緻で、口径は推定14cm.、口縁部に凸帯はなく、また、頸部に文様は認められないが、凸帯下の胴部には斜沈線が認められ、面縄前庭式の一種かと考えられる。

同図13、14（PL.6の14、15）はいずれも凸帯部に刻目を施す口縁部破片で、13は凸帯下に斜沈線を施す。焼成は良く、色調は前者が黒褐色で後者が黄褐色を呈し、石英や雲母を混入する。

5．底　部

底部は第12図20に示した丸底1個で、石英、雲母を含み器壁は薄い。面縄前庭式の底部かと思われる。色調は黒褐色で、焼成は悪い。

二、赤褐色土層（Ⅲ層）

赤褐色土層採集の土器は総数112個、その内訳は有文39個（口縁部9個、胴部30個）、無文70個、底部3個で、沖縄の土器が3片ある他はすべて奄美的文様を施文する。

沖縄の土器

1．熱田原式土器

いわゆる沖縄諸島の前期前半に見られる土器で、二叉状の箆を用いたものの他、単箆を用いて施文したものもこれに含めた。

第13図1（PL.6の19）は叉状工具による2点を1組とする点刻文を口縁にそって施文するが、熱田原例からすると、口縁部には2組の点刻文を配したかと思う。口唇部は無文である。砂粒を多量に含む、暗褐色の土器で、他の土器に比べると脆弱である。

同図7（PL.6の25）は箆先が山形になった単箆を左から右へ押引きしたもので、力を加えたために凹線になっている。凹線下にも、これに平行して一条認められるが、単箆を用いたために完全な平行線とはなっていない。口縁部を欠くが、一部角張った箇所があり、口縁部も若干角張っていたのではないかと考えられる。器壁の薄い、石英を多量に混入する暗褐色の土器で、焼成は比較的良好である。文様は萎縮し、しかも単箆を使用しているところからみると熱田原系の新しい時期のものかと考えられる。

同図13は単箆による横位の沈線を口縁部に2条施文し、その下方に斜沈線を施すが、後者の文様は綾杉状の文様を構成していたかと思われる。口縁部は無文である。器壁は他の土器より若干厚く、石英を多量に混入する黒褐色の土器で、焼成は良好。これに類する文様は浦添貝塚（註15）にも出土がある。

奄美的土器

1．類市来式土器

13図5（PL.6の22）は肥厚部に貝殻文を密に施文する口縁破片で、肥厚部直下で破損している。口唇部は内側から粘土を貼り付けて成形するが文様はみられない。石英を多量に含む黄褐色の土器で、焼成は悪く、脆弱である。肥厚部の断面形状は広義のカヤウチバンタ式に属する。

同図８（PL.６の26）は肥厚部がつまり、その上に貝殻文かと思われる文様を斜めに施し、肥厚下に浅い斜沈線を施す。口縁は若干外反し、器壁は薄く石英を多量に含む脆弱な土器で、色調は黒褐色を呈す。

同図６（PL.６の24）は口縁の肥厚部と直下の頸部に細い沈線を斜行させるが、器面が著しく磨滅しているため文様も消えかかっている。肥厚部の断面は三角形をなす。角閃石や雲母を含む茶褐色の土器で、焼成は悪い。

2．沈線文土器

浅い沈線文を施文する胴部破片が27個採集されているが代表的なもの11例を第13図に示した。

同図10（PL.６の28）は刺突文と沈線文を組み合せた胴部破片で、横位の刺突文は横捺刻文的であり、その点、熱田原の第Ⅲ類土器に近似する要素をもつが、反面、胎土の粒子は細かで焼成、色調等も奄美的であり、河口氏の報文（註５）にこれに近い文様があり嘉徳Ⅱ式に含めるべき資料かと考える。

同図14は、いわゆる綾杉文を施文する胴部破片で、沈線は比較的浅く、器壁の薄い、石英を多量に混入する赤褐色の土器で、焼成は悪く、脆弱である。

同図15～23（PL.６の30～34）は沈線を有する胴部破片で、沈線の密なものと比較的まばらのものがある。沈線は比較的浅い。器壁はいずれも薄く、石英や雲母を含む。色調は黒褐色ないし茶褐色で脆弱なものが多い。

3．面縄前庭式土器

凸帯を貼付する口縁破片が２個採集されている

13図２（PL.６の20）は口縁に凸帯を貼付して肥厚させ、肥厚部に半截竹管状の施文具で爪形文を深く施文し、凸帯下に浅い斜沈線を施す。砂粒を多量に混入する黄褐色の土器で、焼成は悪い。面縄前庭式の口縁破片かと思われる。

同図３（PL.６の21）は凸帯上に半截竹管状の施文具で、ほぼ等間隔に爪形文を施文するが、頸部には文様は認められない。比較的器壁の厚い、黒褐色の土器で、石英を多量混入し、焼成は良好である。以上の２個は面縄前庭式に属する資料と考えられる。

4．肥厚口縁土器

第13図９（PL.６の23）は口縁部に２本の凸帯をずらして重ねたもので、最後のものは口唇よりやや上にはみ出している。凸帯上には斜沈線が２条認められる、石英や雲母を含む、黒褐色の破片で、焼成は比較的良好である。

5．その他の土器

第13図11は先端の尖った細い箆を、口縁にそって密に押し引きしたもので、深い凹線となっている。同破片の下端は凹線の箇所で破損している。暗褐色の脆弱な口縁破片で石英を多量に混入する

同図12も同じ文様を施文する胴部破片で、文様は連点状となっている。石英を多量に混入し、器色は暗褐色、薄手で、焼成は不良である。

同図４（PL.６の27）はハの字形の刻文を横位に施す頸部の破片で、器色は茶褐色、比較的厚く、石英を多量混入する。胎土の粒子は荒く脆弱である。この文様は奄美の土器では、面縄西洞式、面縄前庭式、喜念Ⅰ式までみられる。

6．底　部

底部は３個得られた。第13図26は底径 8.8cm. の平底で、焼成、胎土、色調等、沖縄の前期土器によく似ているが、底径が大きく、また底部から胴部へ移行する部分もコンケィブ状をなし、沖縄の前期のものとは器形を異にしている。おそらく奄美的土器の底部であろう。石英を多量に混入する赤褐色の土器で、焼成は悪く、脆弱である。

同図25は尖底の破片かと思われる。比較的厚く、胎土の粒子は細かで色調は外面が赤褐色、内面は暗褐色である。焼成は比較的良好で、石英を少量混入する。同図24は石英を多量に含む脆弱な破片で、前述のA地点採集の丸底の類かと思われる。器壁は薄く、色調は暗褐色である。

三、表採資料

G地点における表採資料は総数31個で、その内訳は有文11個（口縁５個、胴部６個）無文20個（胴部）である。有文破片はすべて第12・13図に示した。

沖縄の土器

1．熱田原式土器

第12図５（PL.６の４）は器壁の厚さ約5mm.の胴部破片で、細い単篦によって横位に点刻文を施すが、叉状工具でないため２点１組とはなっていない。

石英を多量に含む、脆弱な破片で胎土の粒子は荒くかなり磨滅している。器色は暗褐色、沖縄諸島前期の点刻文に類する破片であろう。

同図８（PL.６の７）は石英を多量に含む、やや暗褐色の山形口縁の破片で、胎土の粒子は荒く、極めて脆弱で、かなり磨滅している。器面には横位の沈線が３本認められ、沈線の間隔からすると単篦によって描かれたものと思われる。施文具を別にすれば、胎土、焼成、色調等は沖縄諸島の前期範疇の土器である。

同図６（PL.６の５）は口縁部の破片で、器面には文様は見られないが、口唇部は半截竹管状の工具によるハの字状の文様を施文する。口縁は僅かながら外反している。石英を多量に含む暗褐色の土器で、胎土の粒子は荒く脆弱である。器面に文様はなく、熱田原式の概念から外れるが、色調、焼成、胎土等、前期範疇の土器であり、とりあえず、ここに含めた。

2．凸帯文土器

第12図７（PL.６の６）は凸帯上に刻目を施す胴部破片で色調は黒褐色、焼成は悪く、胎土には石英を多量に混入する。この土器はE地点出土の凸帯文土器（第９図４）に類するものと思われる。

奄美的土器

1．類市来式土器

第12図１（PL.６の１）は口縁の断面が三角形の肥厚をなすもので、肥厚部に貝殻文を深く施文するが文様は奄美の市来式に比較すると規格性を失なっている。石英を少量含む、暗褐色の土器で、器壁は薄く、焼成は比較的良好である。

同図４（PL.６の３）は肥厚部に斜沈線を施した口縁部破片で、口唇部は欠損しているが、肥厚部の断面は三角形をなすものと思われる。この種の斜沈線は貝殻文に由来すると考えられ、ここに含めた。器面は磨滅がいちぢるしく文様は消えかかり、胎土には石英や雲母を多量に混入する茶褐色の薄手の破片で、焼成は普通である。

2．沈線文土器

第12図９、10、11（PL.６の８、９、10）は単篦で細い沈線を縦位、斜位に施文したもので、９の沈線は比較的深いが、他は浅い。いずれも石英、を多量に含む、暗褐色の器壁の厚い胴部破片で雲母を含むものもある。焼成は普通である。

3．面縄前庭式土器

第12図３（PL.６の２）は口縁部にそって凸帯を一条囲繞したもので、凸帯上に棒状工具による刺突文を一条横位に施文し、凸帯下にも斜沈線を数条施すが、器面の磨滅が著しく、文様は消えかかっている。石英を多量に含む黄褐色の薄手の土器片である。同図２は胴上部に凸帯を横位に配し、凸帯上に刻目、上下に沈線を施すもので、器壁は薄く、石英を多量含む。他の標品同様器面はいちぢるしく磨滅している。

b）石　　器

本地点採集の石器は破片を含めて12個得られたそのうち表採によるもの５個、第II層壁面採集のものが７個である。他に注目すべき遺物としてチャートの欠片が表採で１個、第II層壁面で１個得られている。

第14図２～５（PL.８の５～８）に示した４例は、いわゆる円形石斧に属するもので、いずれもアルコース砂岩製である。同図２、４、５は表採品で、２（PL.８の５）は中央部が最も厚く、周辺部に向かって厚さを減ずる。凹石を転用したものと考えられ、表面中央部には浅い凹みが見られる。裏面は全面打欠によって整形されている。４（PL.８の７）は三角柱状のすり石の角の部分を利用したもので、図に見るように上面の傾斜は他のどの石器よりも急で、上面の中央に打痕を有する。裏面は全面打ち欠かれている。５（PL.８の８）は表採資料中最も大きな破片で、裏面は全面打ち欠かれ表面は大部自然面を残している。

全体的に扁平である。3（PL.8の6）は壁面第II層の採集品で、表面の大部分、裏面は全面打ち欠いて整形し、平面観は1と同じく円形である。このような石器は今のところ沖縄諸島では報告がなく、ただ本学考古学研究会所蔵の読谷村浜屋原貝塚採集品の中に類例が1例ある。奄美の宇宿貝塚（註4）嘉徳遺跡（註20)、鹿児島の上加世田遺跡（註20）では類例の報告がある。宇宿貝塚や嘉徳遺跡では、いわゆる宇宿下層式土器に伴ない、本地点においても宇宿下層式が主体をなしているところから、これらの土器に伴う石器かと考えられる。その他に研磨痕を有する石器片が8個得られたが、破片が些細なため器種は不明である。

（C）考　　察

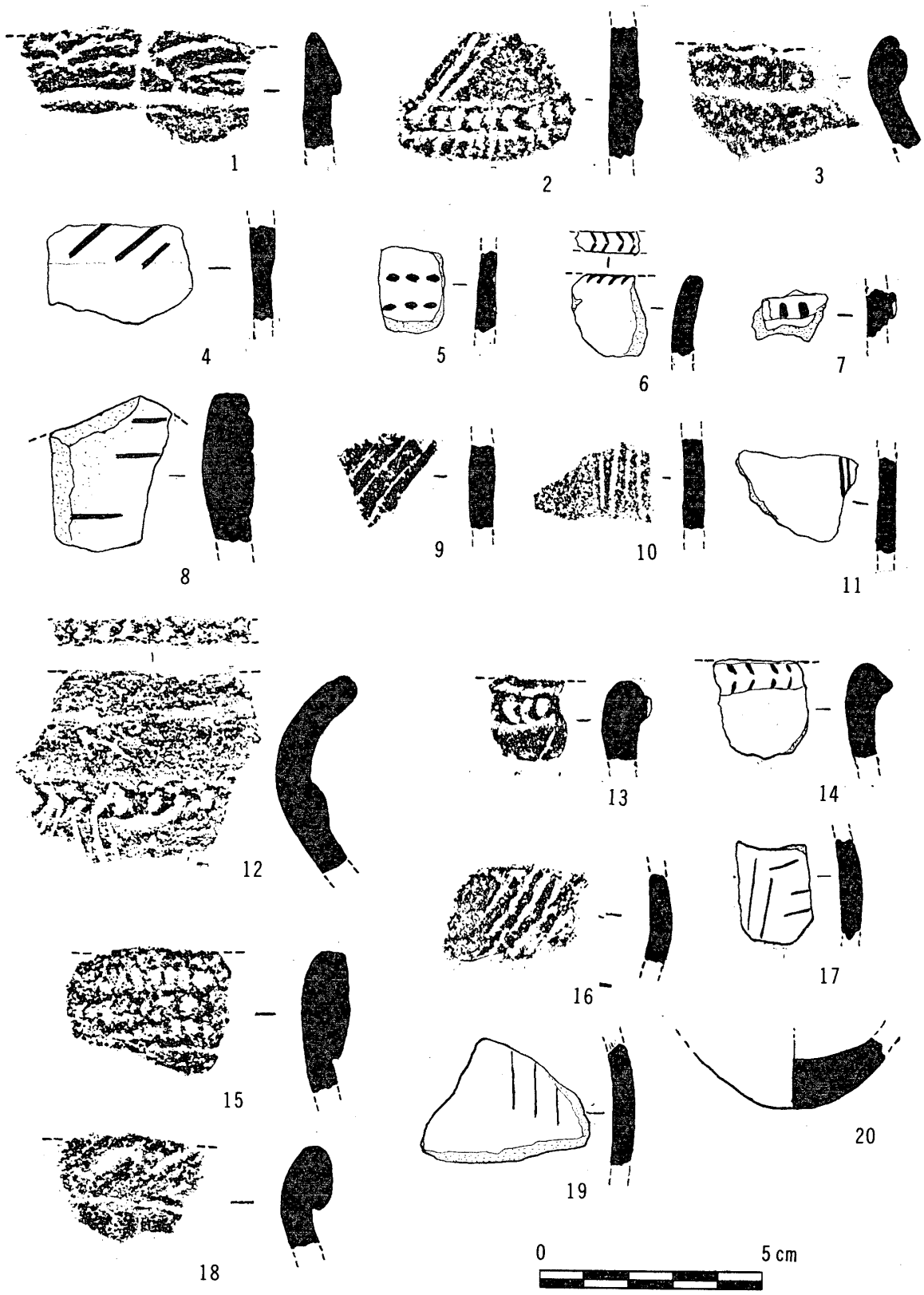
以上、土器と石器について簡単に説明した。本地点の土器についてみると、沖縄の前期的特徴を有するものが3例ある他はすべて浦添貝塚にみられるような奄美的土器であった。その点、C地点と同じく第二の浦添貝塚とも称すべき遺跡であるが、発掘調査を行なった訳ではなく、沖縄諸島の土器との共伴関係をおさえることはできなかったのは残念である。しかし2層の遺物包含層が認められ、熱田原式類似の形式を含むことから、発掘を実施すれば前記諸問題のうち若干は解決をみるのではないかと考えられる。

沖縄的特徴をもつ土器3例（第13図1、7、13)のうち文様についてみると、1は熱田原式に含めてよく、7は熱田原的であるが、連点文を密に押し引きしたり、単箆を使用している点で異なり13も口縁にそって水平方向に施された沈線が単箆によるなど差異がみられる。13は前述のように浦添貝塚にもみられる。単箆を使用していることから7、13は熱田原に後続する時期の資料かと考えられる。上記の3例はいずれもIII層採集のものであるが、この種の土器が上層にも含まれているかどうかは不明である。本地点で最も注意を要する土器は口縁の肥厚部に貝殻文を施文するもので、地表採集も合せて4個の発見があった。この種の土器は浦添貝塚では新しい時期の市来式土器との共存が知られている。よって下層のある時期は浦添の市来式の時代に比定できると考えるが、両者の明確な対応関係は発掘調査を実施した段階で行ないたい。貝殻文は奄美出土の市来式土器に比べると規格性が失なわれ、雑になっており、また奄美のそれは肥厚した文様帯に納っていて、肥厚部以下に施文されたものはないが、本地点のものには肥厚部下に沈線を施文するものもある。肥厚部断面の形式には2種認められ、一つは断面が三角形をなし、他は歯ブラシ状の肥厚を示すもので、両者の相違がどのような意味をもつかは現段階では不明である。また肥厚部に斜沈線を施すものが若干採集されているが、これは貝殻文を模したものかと考えられる。面縄東洞式に類するものは上層（II層）で1片得られた。歯ブラシ状の口縁肥厚部（第12図　15）に横位の爪形が3本認められる。肥厚の形態は浦添に近いと思われる。浦添や奄美の状況からすると下層でも出土が予想される。

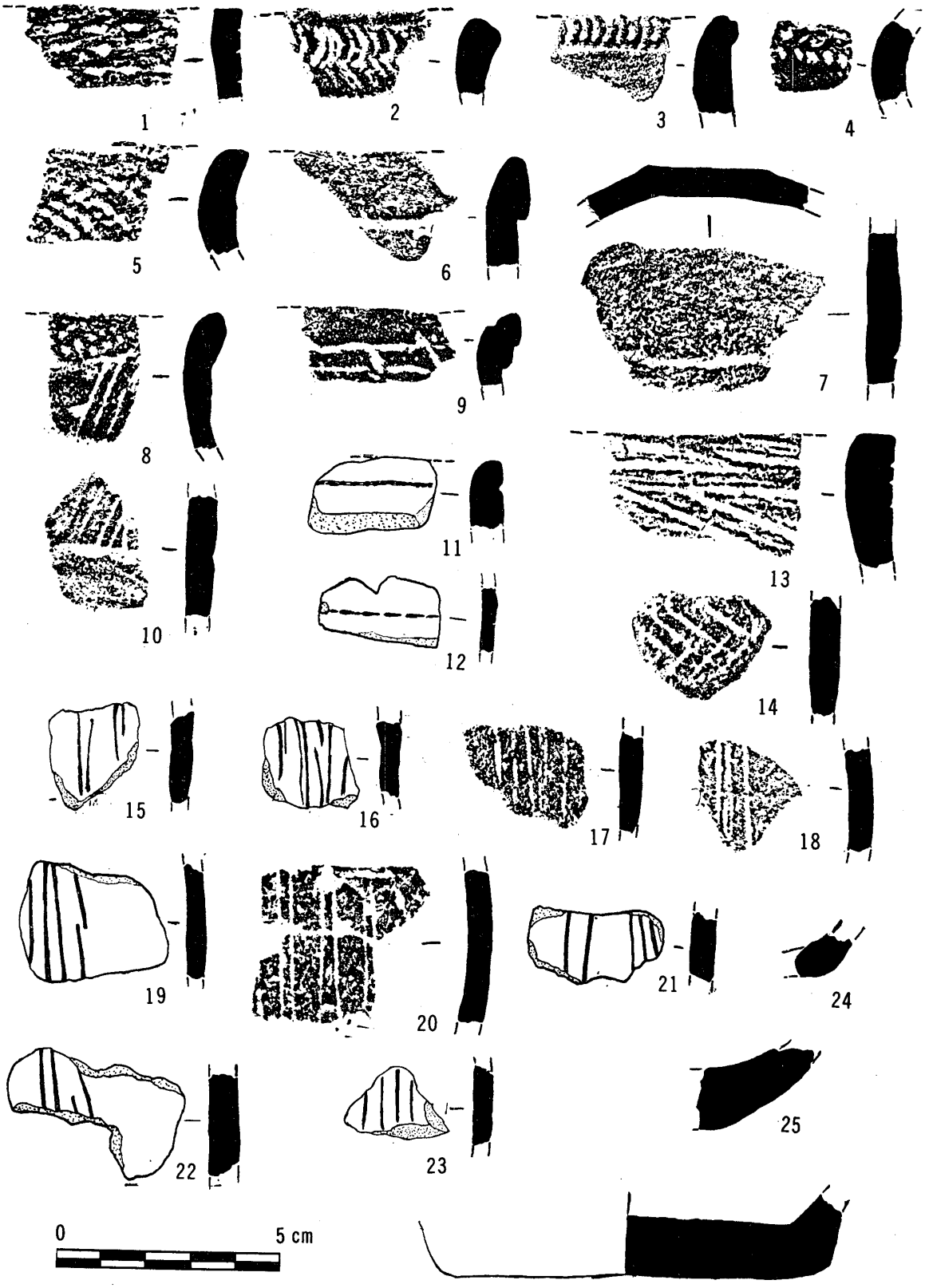
沈線文にまとめた文様には嘉徳II式に属するもの、後述の凸帯文土器の胴部文様に類似するものが含まれるが、破片が小さいため両者を区別することをさけた。中には面縄西洞式に分類される沈線文も含まれているかもしれない。沈線文は一般に浅い施文となり、シャープな沈線は少ない。凸帯文土器としてとらえたものは大部分が面縄前庭式に属するものと考えるが、凸帯を口縁に貼付しないものや、凸帯間に沈線を施文しないものがあり、奄美のものに比べると沈線文は一般に浅く、雑になっている。資料が小さく磨耗したものが多いことから面縄前庭式との詳細な比較は困難である。壁面採集の4例についてみると、凸帯上の文様は爪形文を施すものが下層に2例、ハの字状の点刻文を施すものが上層で2例検出されているが、両者の前後関係を暗示する資料かと考えられる。面縄西洞式と明確に判断できる資料は今回の調査では得られていない。

石器は円形石斧が4個採集されたが、そのうち1個は壁面第II(上層)層での発見である。嘉徳の状況からすると下層の第III層でも発見の可能性がある。

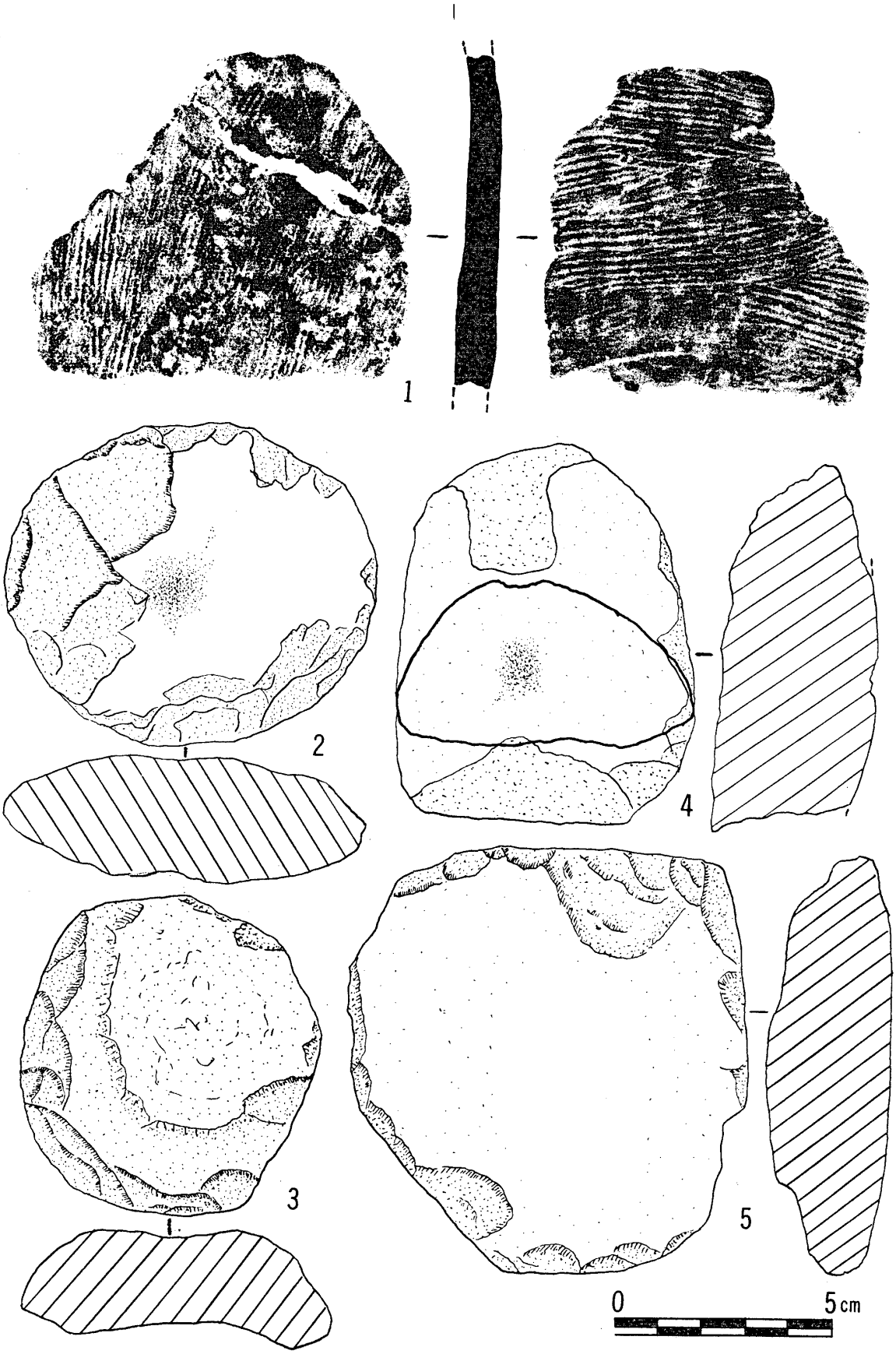
さて以上、本地点採集の遺物について概観した



第12図　G地点出土遺物
〔1～11＝表採、12～20＝第II層〕



第13図　G地点出土遺物
〔第Ⅲ層〕



第14図　E・G地点出土遺物
〔1＝E地点、2～5＝G地点〕

が、前にも述べたように発掘を行なったわけではないから、前記土器の層位上の先後関係を明示するところまでは行き得ず、奄美の編年に従って説明したが、上記の資料からすると、面縄東洞式から面縄前庭式におよぶ時期の遺跡かと考えられるまた、熱田原式土器が僅かながら下層にみられ発掘を実施すればそれらとの関係が摑めるのではないかと思われる。

Ⅶ）その他の資料

ここでは当真嗣一氏提供の石斧と、われわれが地表調査の際、名嘉山兼昭氏からゆずり受けた石斧について紹介する。当真嗣一氏の資料は佐久川氏よりゆずり受けたもので、隅原の採集品といわれるが、採集場所は不明である。

第８図３（PL.７の５）に示したものは当真氏の資料で、刃部及び上面はよく研磨されているが、他は雑で、特に背面の一部には製作時に打ち欠いた跡が、段をなして残っている。長さ10cm.，刃部の幅4.6cm.，厚さ2.3cm.の磨製両刃石斧である。

同図４（PL.７の６）は名嘉山氏提供の資料である。名嘉山氏の宅地（字昆布992番地）内から出土したもので、両刃の磨製石斧である。頭部と刃部の一部を破損するが、よく研磨されている。長さ9.2cm.，刃部の副4.7cm.，厚さ1.9cm.である。

(五) 結　　語

以上、各地点の遺物を紹介した。隅原遺跡はA～Gの遺跡群からなるが、採石工事による損壊が大きく、前述のように未攪乱層を保存する遺跡は少なかった。しかし、G地点では２層の未攪乱層が確認され、発掘を実施すれば編年上の重要な資料が得られるものと思われる。

前述の７地点は前期、中期、後期のいずれかの時代に属するが、いずれの地点においても貝層は認められなかった。F地点は中期に属し、この時期の遺跡は貝塚を構成しないのが普通である。しかし、前期や後期の遺跡は普通貝塚を構成し、その点で、本遺跡は他と異っている。後者の状況については今後も引き続き検討の必要があろう。

本遺跡採集の人工遺物は石器と土器だけで、貝器、骨器は発見されてない。石器では石斧、磨り石、石鏃等が得られたが中でも円形石斧、定角石斧、石鏃は出土例が少なく、貴重な資料である。

土器についてみると、A・E・Fの３地点を除く他の地点では奄美的文様を有する土器が主体をなし、浦添貝塚に次ぐ二番目の奄美関係遺跡であるが奄美諸島の土器と比較すると文様にくずれを生じたものが多く、施文も一般的に浅く、その点では浦添貝塚(註８)の土器に近似する特徴を有している。時代の若干下る時期のものであろう。ただ、残念なこ

土器型式＼地点		A	C	D	E	F	G	備　考
沖縄的文様	熱田原式		○		○		○	
	大山Ⅱ類				○			
	カヤウチバンタ式				○			
	宇佐浜式		○					
	中期土器					○		型式名がないので時期名を示した。
	後期土器	○						
奄美的文様	類市来式		○		○		○	貝殻文
	面縄東洞式		○				○	
	嘉徳Ⅰ式		○					
	嘉徳Ⅱ式		○				○	
	面縄前庭式			○	○		○	

第９表　各地点の主要土器

とは、今回の資料のほとんどが表採資料で、沖縄諸島の土器との共伴関係が摑めなかったことである。G地点の発掘によって手掛りが得られるのではないかと考える。

各地点採集の主な土器は前頁、第9表の通りである。

上表からすると C.D.G地点は奄美的文様を有する土器が主体をなし奄美の編年によれば面縄東洞式～面縄前庭式(註5)の時代に比定できる。E地点は沖縄的文様を有する土器が主体で前期前半末～前期後半末に位置づけられる。F地点の土器は中期的特徴を有し、A地点はC14測定、1640±250B・P（註3）及びくびれ平底の出土から後期に編年できる。したがって、本遺跡は C、D、E、G地点を前期前半末～中期初頭、F地点を中期後半、A地点を後期のある時期に編年できるかと思う。

註

（1）高宮広衛・多和田真淳、「読谷村赤犬子遺跡調査報告」、文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1961年

（2）国分直一・三島格、「沖縄主要遺跡におけるC14年代の検討」、考古学ジャーナル No.83、1973年

（3）古川博恭氏の御好意により、学習院大学木越研究室で測定したものである。

（4）国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野国義磨・原口正三、「奄美大島の先史時代」、『奄美—自然と文化』、九学会連合編、1959年

（5）河口貞徳、「奄美における土器文化の編年について」、鹿児島考古9号・鹿児島考古学会、1974年

（6）小牧実繁、「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」人類学雑誌、第35巻第6号、1912年。

（7）金武正紀氏の沖縄考古学会(1974年2月9日)における発表による。

（8）新田重清、「浦添貝塚調査概報」、南島考古、第1号、沖縄考古学会、1970年。

（9）高宮廣衛、「熱田原貝塚の土器」、沖縄国際大学文学部紀要社会篇、創刊号、1973年。

（10）松村瞭、「琉球荻堂貝塚」、東京帝国大学理学部人類学教室研究報告、第3篇、1919年。

（11）高宮廣衛、「いわゆるカヤウチバンタ式および宇佐浜式土器について」、沖縄国際大学文学部紀要社会篇、第2号、1974年。

（12）新田重清・嵩元政秀、「嘉手納貝塚発掘報告書」、文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1960年。

（13）賀川光夫・多和田真淳、「沖縄宜野湾村大山貝塚調査概要」、文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会、1958年。

（14）金武正紀、「宮城島の先史及び原史遺跡調査概要」、郷土 第2号、沖縄大学学生文化協会、1965年。

（15）高宮広衛、「天久遺跡」、那覇市の考古資料、那覇市史資料篇1の1、1968年。

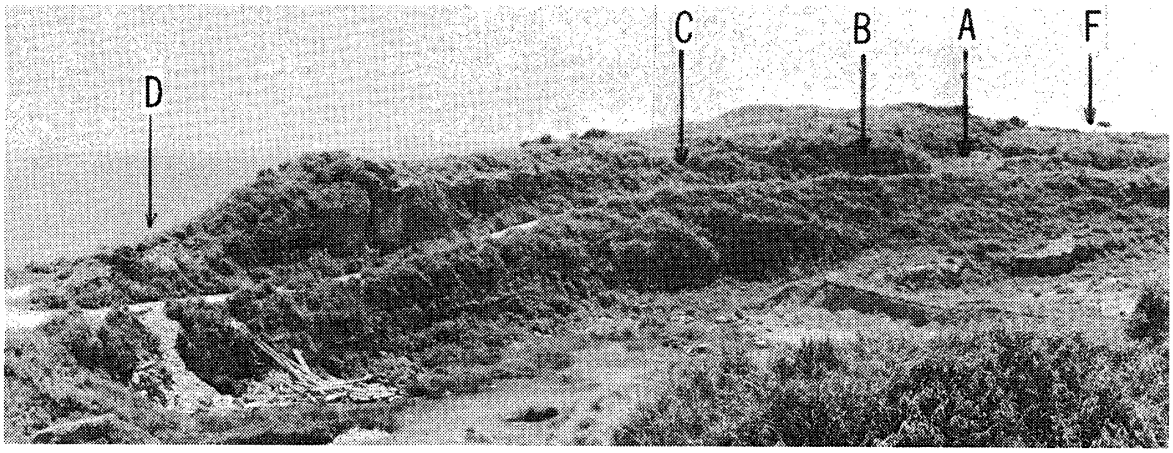
（16）新田重清、「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」、古代文化156、1971年。

（17）嵩元政秀、「平安名第二貝塚」、興南研究紀要 第二号、興南高等学校、1973年。

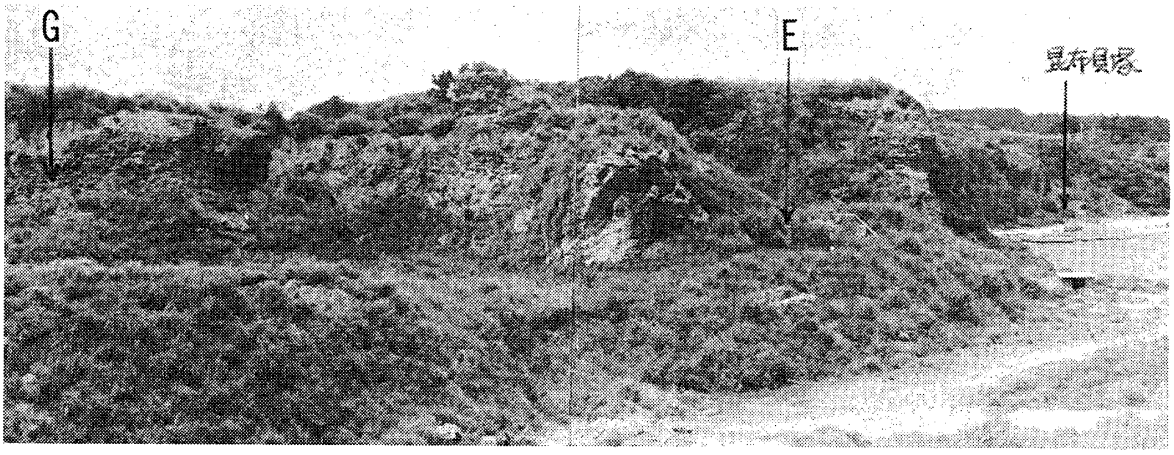
（18）金武正紀、「勝連村幸地原貝塚」、郷土 第4号、沖縄大学学生文化協会、1967年。

（19）友寄英一郎・嵩元政秀、「平安座東ハンタ原貝塚調査概報」、琉球大学法文学部紀要社会編、15、1971年。

（20）河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡隆夫、「嘉徳遺跡」、鹿児島考古、第10号、鹿児島考古学会、1974年。



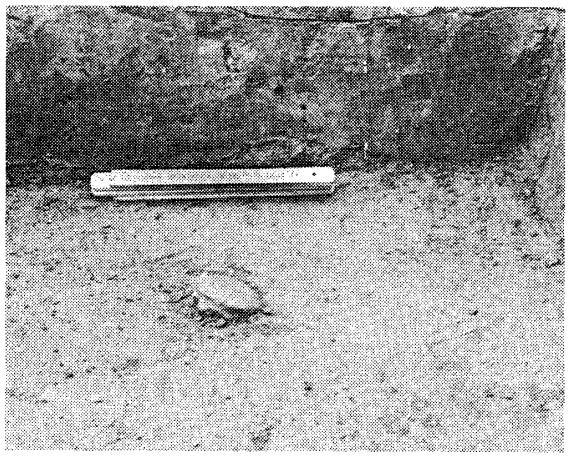
〔写真１〕 A・B・C・D・F 地点(後方は平安座、宮城、伊計島)



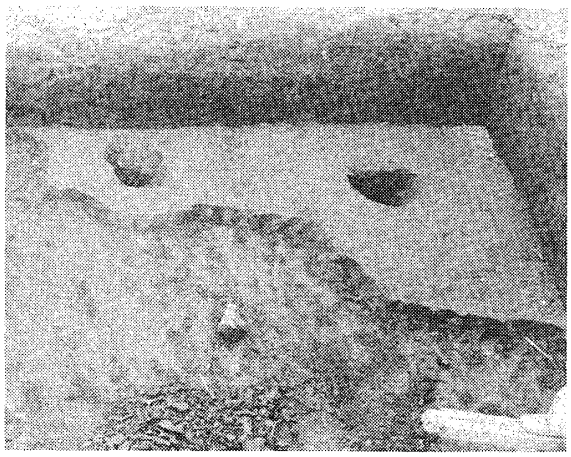
〔写真２〕 E・G地点及び昆布貝塚

〔写真３〕
A地点発掘状況

PL.1.　隅原遺跡の遠景とA地点

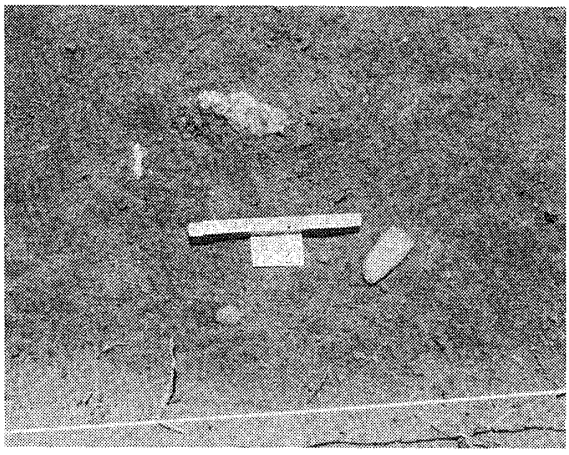


〔写真１〕A地点H-6ピット
III層出土、くびれ平底

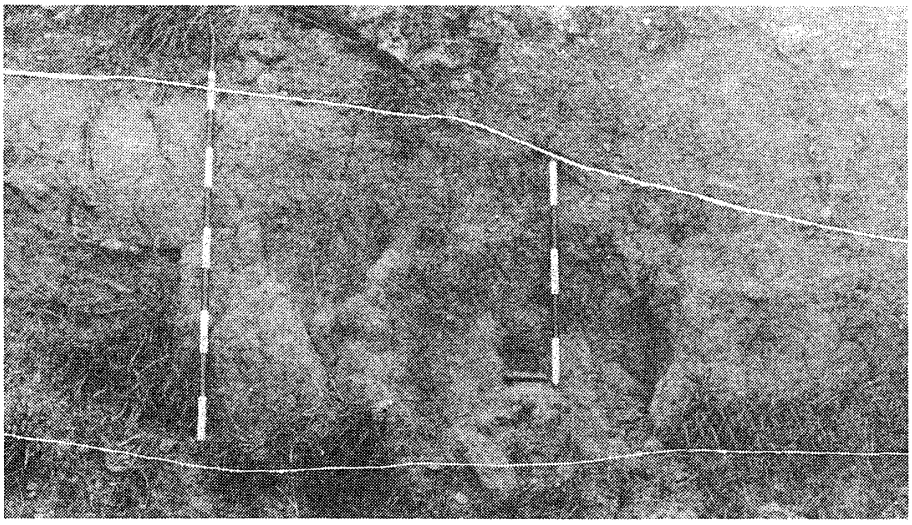


〔写真２〕A地点H-6ピット
Ⅳ層、柱穴らしきもの

〔写真３〕F地点
II層の最下部及び地山にトラクターのスキ跡



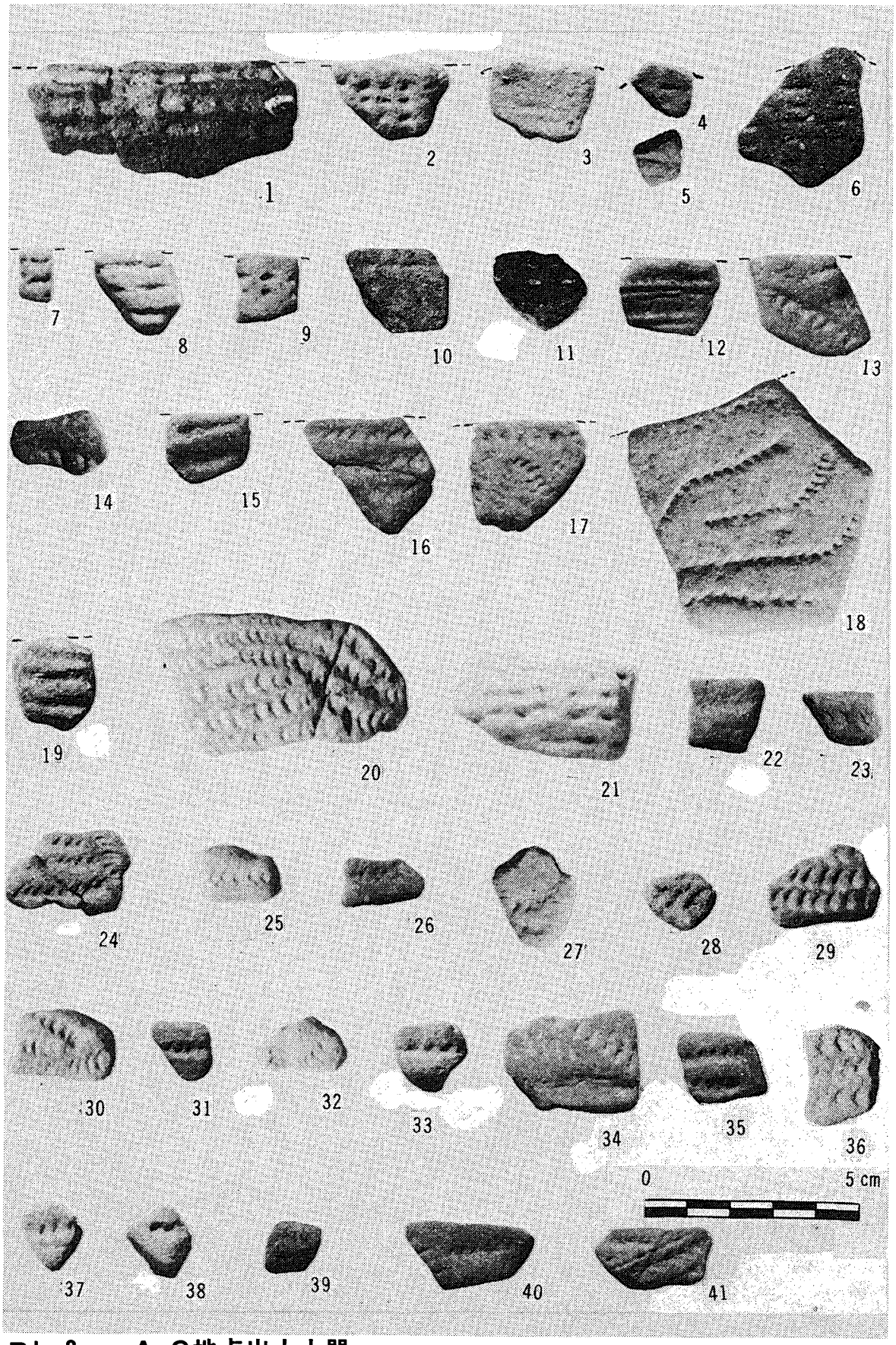
〔写真４〕F地点C-3ピット
II層出土、石斧



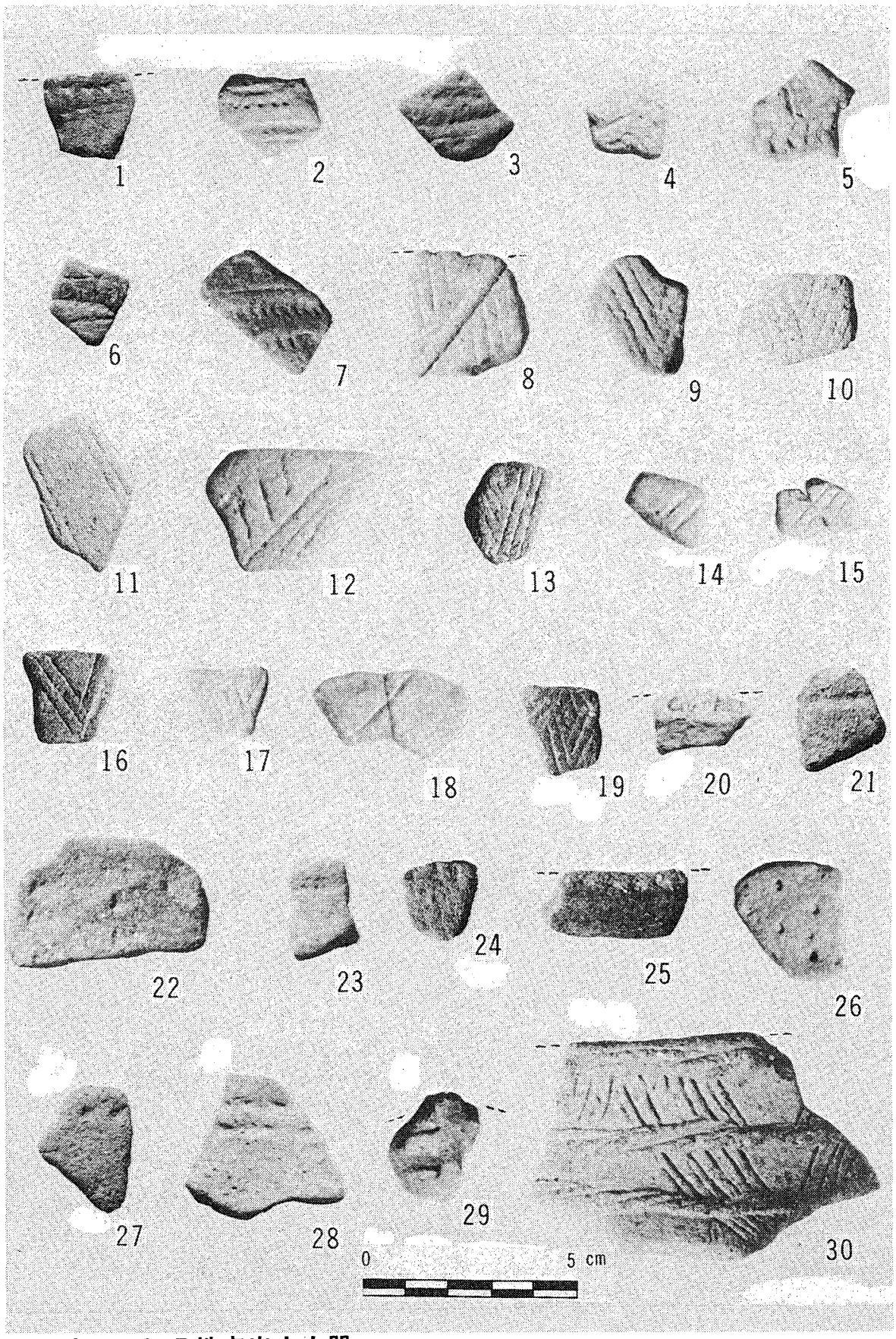
←包含層

〔写真５〕
E地点
包含層状況

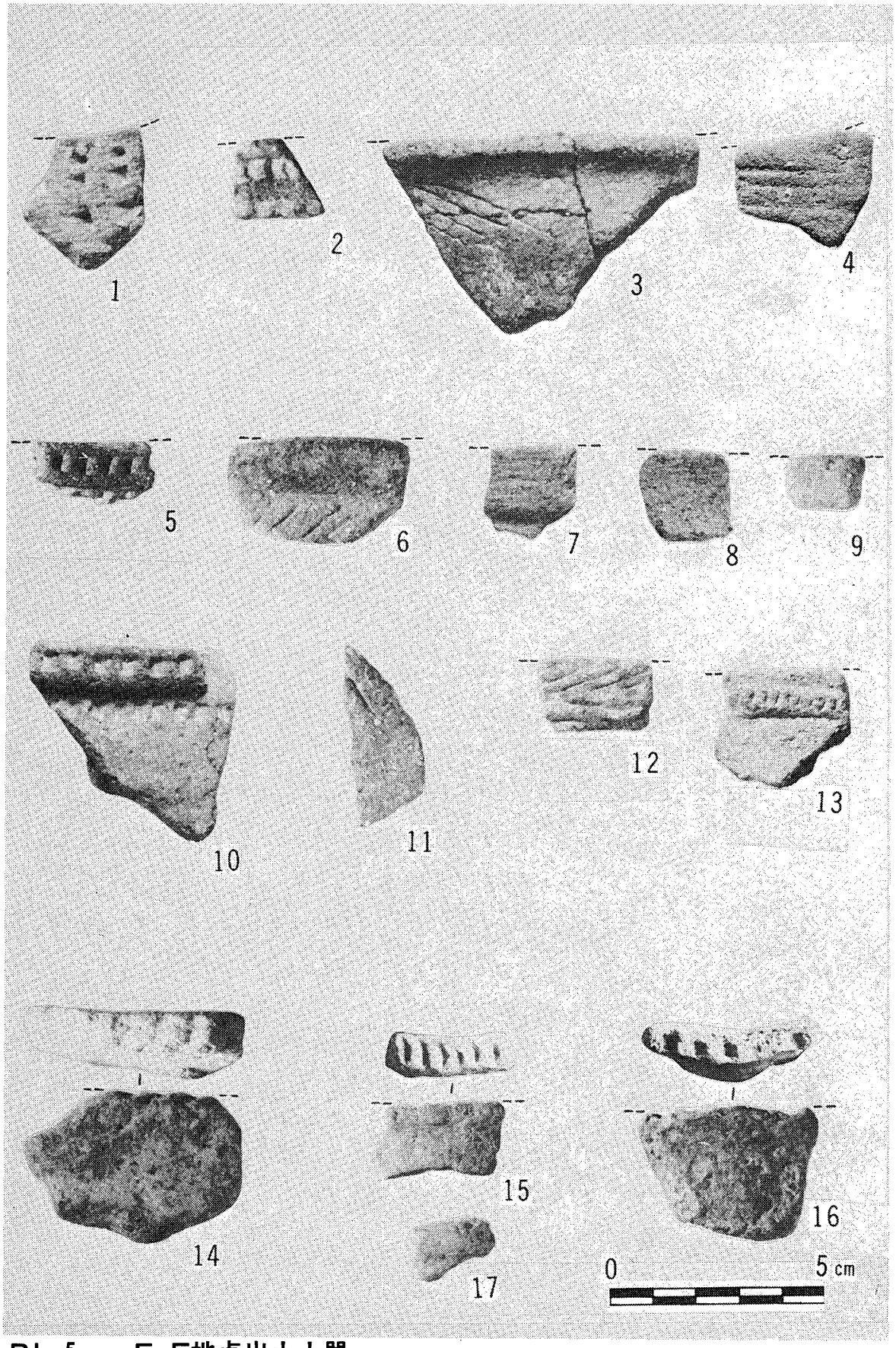
PL.2.　隅原遺跡発掘状況



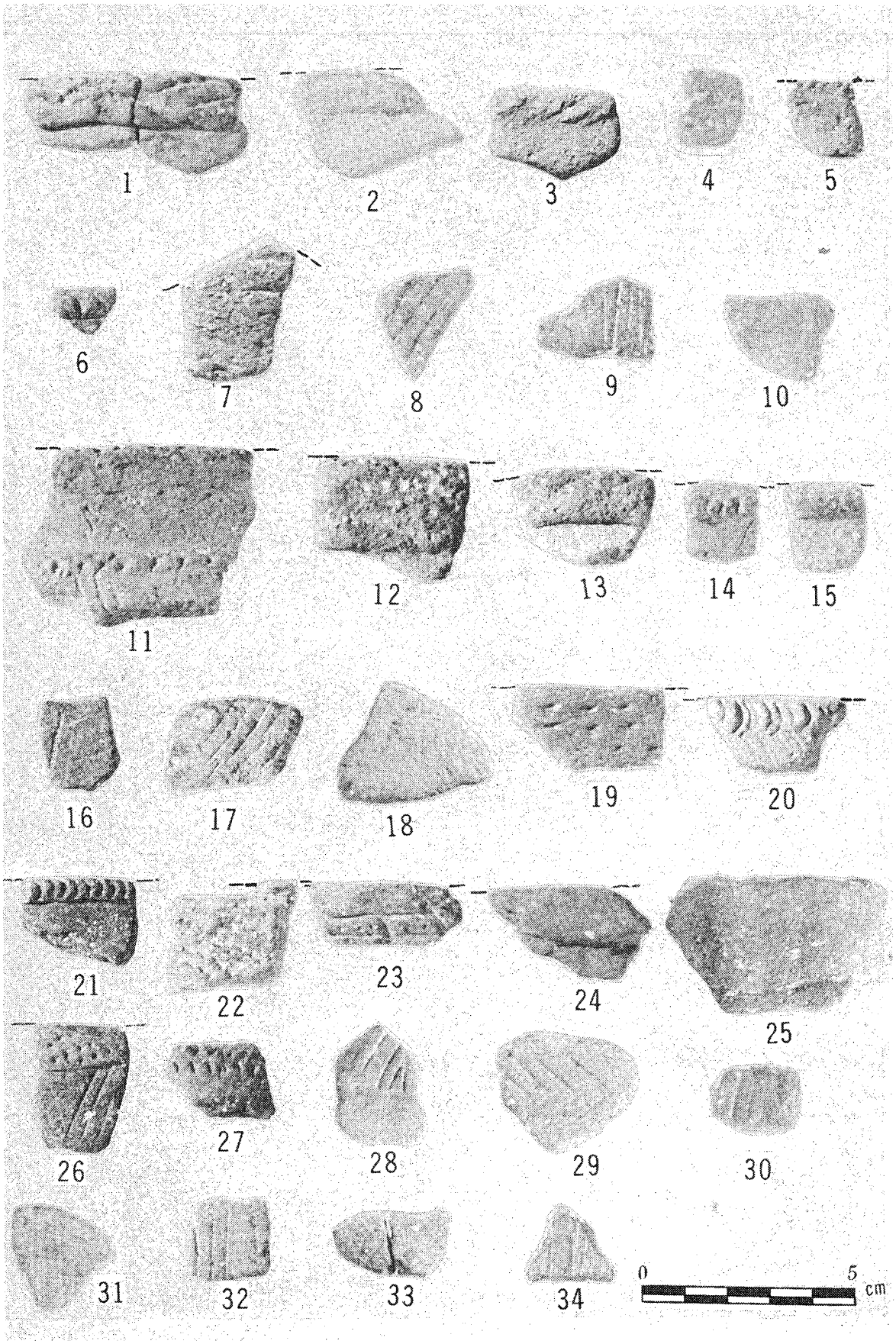
PL.3.　A・C地点出土土器
〔1＝A地点、2～41＝C地点〕



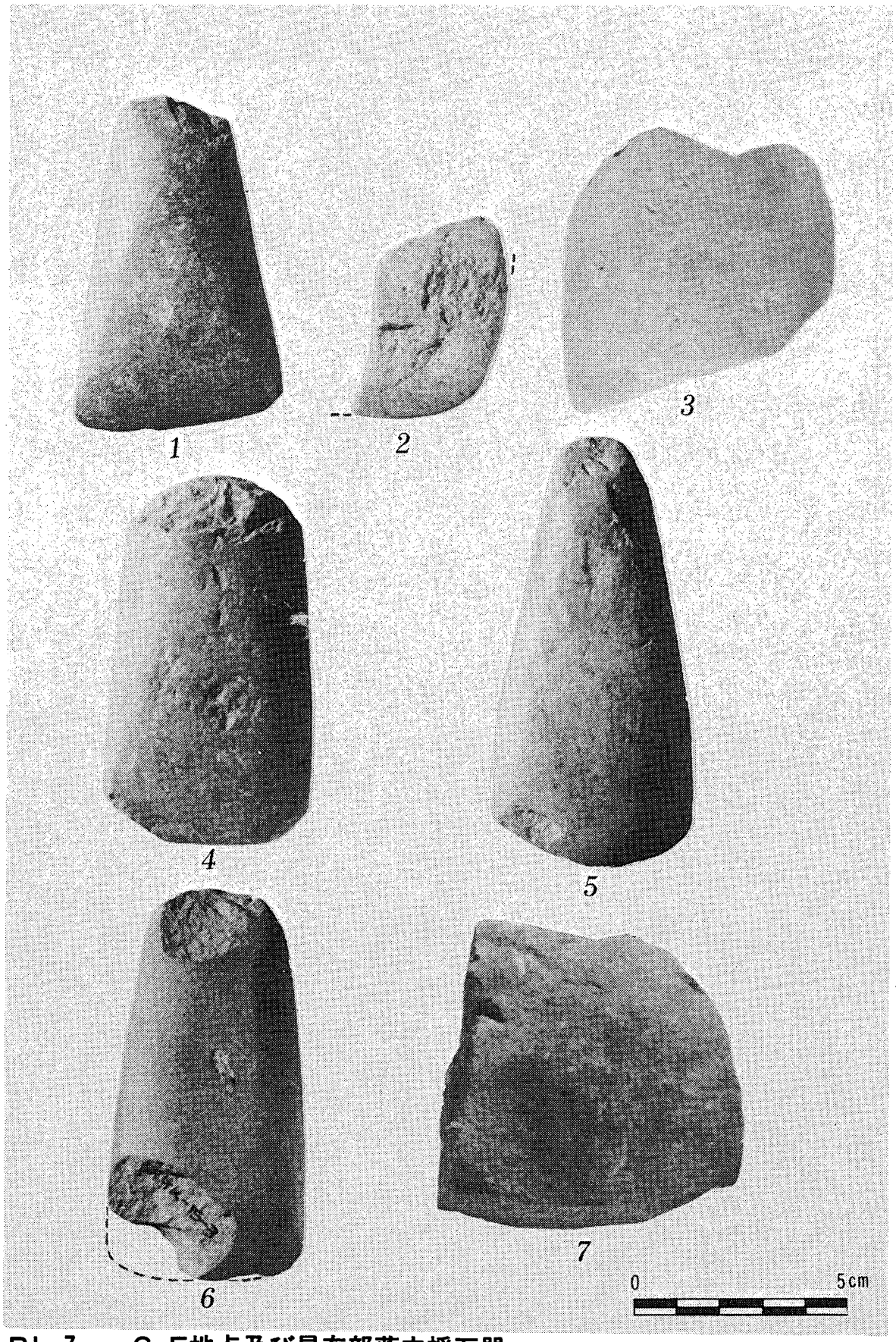
PL.4.　C・D地点出土土器
〔1～29＝C地点、30＝D地点〕



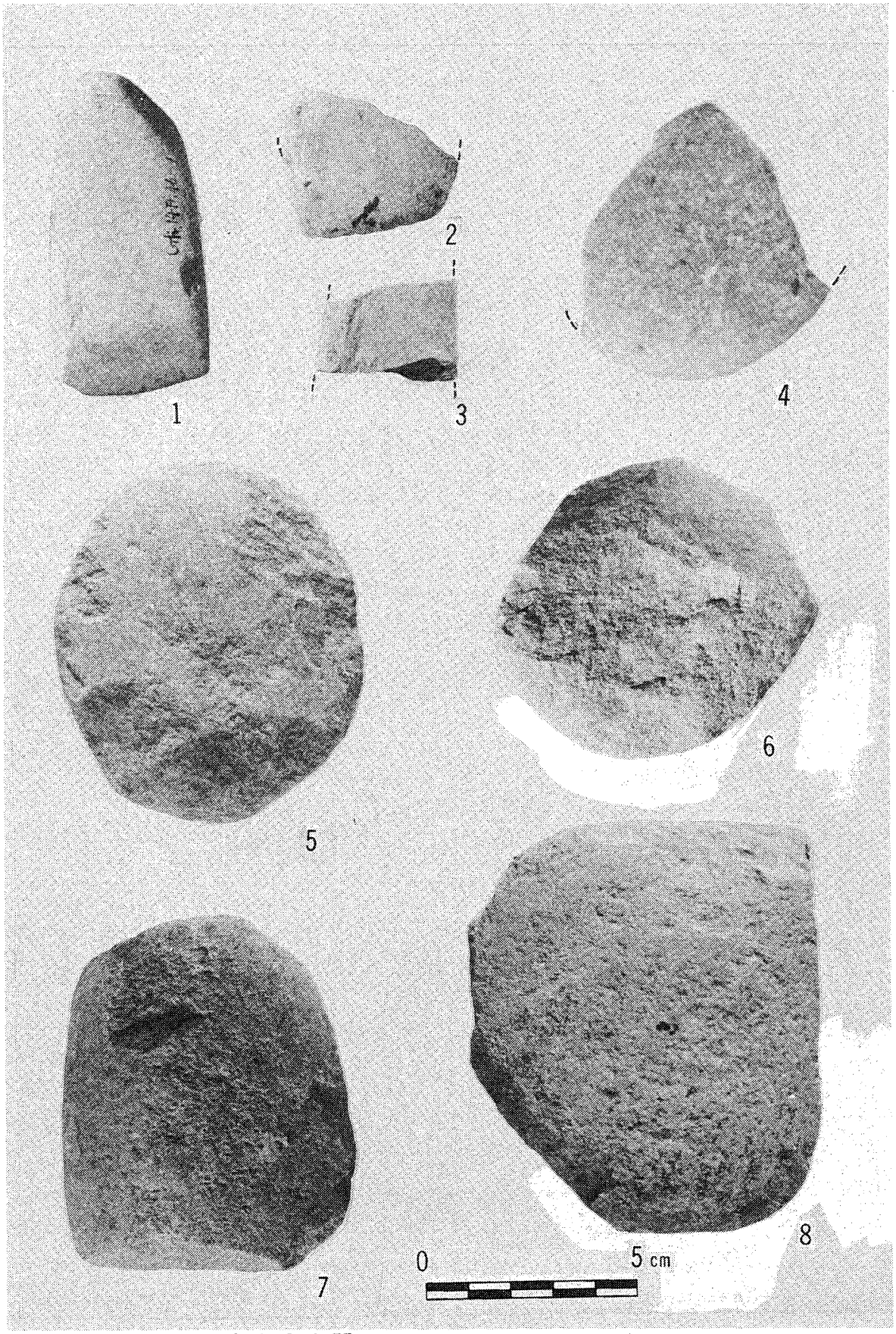
PL.5.　E・F地点出土土器
〔1～13＝E地点、14～17＝F地点〕



PL.6.　G地点出土土器
〔1～10＝表採品、11～18＝黒褐色土層（II層）、19～35＝赤褐色土層（III層）〕



PL.7.　C・E地点及び昆布部落内採石器
〔1～3＝E地点、4・7＝C地点、5＝出土地不明(隅原)、6＝昆布部落内〕



PL.8.　F・G地点出土土器

〔1～4＝F地点、5・7・8＝G地点表採品、6＝黒褐色土層（II層）〕